

## 第5章

# ジョン・ガランにおける「個人支配」の研究

栗本 英世

### はじめに ジョン・ガランの死とその後

2005年7月30日、そのキャリアと国民的な人気、および世界的な名声の絶頂期に、ジョン・ガランは不可解なヘリコプター事故によって死亡し、翌日、その衝撃的なニュースは世界中を駆けめぐった。ジョン・ガラン・デ・マビオル(John Garang de Mabior)の死亡時の肩書きは、スーダン共和国第1副大統領、スーダン人民解放運動(Sudan People's Liberation Movement: SPLM)議長、スーダン人民解放軍(Sudan People's Liberation Army: SPLA)最高司令官である。また、近いうちに、新たに樹立される南部スーダン政府の大統領に就任する予定であった。ガランの死は、2005年1月9日に調印された包括的平和協定(Comprehensive Peace Agreements: CPA)によって達成されたばかりの平和の前途に暗雲を投げかけた。事実、死亡のニュースが報道された8月1日に、首都のハルツーム(Khartoum)と南部の首都ジュバ(Juba)では大規模な暴動が発生し、北部人と南部人が衝突して数十名が死亡した(本文中の地名については図1, 2を参照)。

SPLM/SPLA(以下、SPLM/A)指導部の対応はすばやく、ガランに次ぐナンバーツーの地位(SPLM副議長兼SPLA参謀長)にあったサルヴァ・キール・マヤルディット(Salva Kiir Mayardit)を後継者に指名した。そして、短期間のうちにガランの葬儀を組織した。

図1 スーダン全図



- 凡例)  国境  
 ケニア 周辺国名  
 スーダン国内の州境  
 西エクアトリア 州名  
 南部スーダン

(出所) 国連スーダン情報ゲートウェイ( <http://www.unsudanig.org> )提供の地図( Map 375 Sudan General\_May 2004. pdf )より筆者作成。

(注 1) 州境は2004年5月現在。

(2) 州名は2004年5月現在。本文中で言及のあるもののみ記した。

図2 南部スーダン（部分図）



凡例) ————— 国境  
 ケニア 周辺国名  
 - - - - - スーダン国内の州境

(出所) 国連スーダン情報ゲートウェイ (<http://www.unsudanig.org>) 提供の地図 (Map South Sudan General Planning Map A1\_13 Nov 16. pdf) より筆者作成。

(注) 都市・町名は本文中で訳のあるもののみを記した。

ガランの遺体は最初、事故現場に近いニューサイト (New Site) に安置された。ニューサイトは、ケニアとウガンダとの国境付近の、隔絶した人口希薄地域に位置しており、ガランの公邸のひとつがある。隔絶はしているが、ケニア北部にある、南部スーダンに対する人道的援助の基地であり、国連機関や国際NGOの事務所があるロキチョキオ (Lokichokio) からは、セスナ機で20分足らずで到着する。キールを筆頭とするSPLM指導部とガランの未亡人

レベッカ・ガラン (Rebecca Nyangdeng de Mabior) は、ナイロビから空路到着した外交団の弔問を受けた。その後遺体は青ナイル(Blue Nile)州(北部スーダンの)のクルムック(Kurumuk)、南部スーダンのルンベック(Rumbek, SPLMの「首都」)、ボル(Bor, ガランの故郷)、イエイ(Yei)を巡回し、それぞれの場所で人々の弔問を受けた。最終的な葬儀は、8月6日、ジュバ(Juba)の英国国教会で執行された。葬儀には、スーダンのパシール(Omar Hassan Ahmed al-Basir)大統領をはじめ、ケニアのキバキ(Mwai Kibaki)大統領とモイ(Daniel arap Moi)前大統領、南アフリカ共和国ムベキ(Thabo Mbeki)大統領など、多数の国家元首やVIP、国際機関の代表が参列した。葬儀の参列者のリストは、国際社会においてガランが認められていた地位を反映している。

ジュバ空港の設備は劣悪であり、市内には外国からの賓客が滞在できるような宿泊施設もない。ガランの葬儀は、この南部スーダン辺境の都市にとって分不相応ともいえる、歴史上初めての国際的な行事であった。

ガランの葬儀は、2005年8月の時点では、いまだ樹立されていなかった、SPLMを主体とする新しい南部スーダン政府にとって、最初の国家的な事業であったと考えられる。ジュバのまえに、北部スーダンのクルムックを含む4カ所を遺体が巡回したことの政治的な意義は大きい。また、CPAが調印されたといっても、ジュバは依然として政府軍の支配下にあった。SPLAの部隊と幹部たちは、ガランの葬儀を機会に、初めてジュバに乗りこんだのである。交通・通信状況の劣悪さを考えると、ガランの死亡が発表された8月1日から、6日の葬儀までのわずかな、かつ混乱をきわめた期間に、これだけのことを計画し実行したSPLMの組織力は賞賛に値する。

ジョン・ガランは、死の結果、南部スーダン最初の国家的英雄に祀り上げられたといえる。CPAの結果、南部スーダンには政府が樹立され、ガランが大統領に就任する予定であった。6年間の暫定期間をへた2011年には、住民投票が実施され、南部スーダンが独立した主権国家になるか、統一されたスーダんに留まるかが決定されることになっていた。SPLM/Aの創設時から一貫して、ガランは、南部スーダンの分離独立ではなく、スーダン全体を解放し

て「新スーダン」を建設することを目標に掲げてきた。CPAの調印以降、南部、北部にかかわらず、ガランの国民的な人気は高く、自由で公正な選挙が実施されたなら、スーダン全体の大統領に選出される可能性も、現実味をおびて議論されていた。こうしたすべてのことを、自身が主役となって実現するまえに、ガランは亡くなってしまった。しかしその結果、形成途上にある南部スーダン国民は、「国父」と呼ぶべき統合の象徴を獲得したのであった。ガランの遺体は、南部政府の官庁街がある町はずれの丘の上に建設された、モニュメント的な墓に埋葬された。その後、墓は人々が詣でる聖地になった。

## 第1節 ゲリラ組織の指導者の考察

約22年間にわたってゲリラ組織の指導者であり、死の直前の3週間だけ、国家の第1副大統領の地位にあった人物を、なぜ「アフリカの個人支配」をテーマとする本書でとりあげるのか。その理由を以下で簡単に述べたい。

脱植民地期のアフリカ諸国は、多数の反政府武装組織、あるいはゲリラ組織を生み出した。ゲリラ組織のリーダーも、大統領や首相と同様、政治・軍事的なリーダーである。もちろん、国際的に主権を認められた国家の元首と、単なるゲリラのリーダーを同列に論じることはできないという意見はあるだろう。しかし、たとえば冷戦期には、親米あるいは親ソ政権と戦っていた反政府組織は、政権が属するのとは逆の陣営からは外交上国家並みの待遇を受けていた。また、「何々民族解放戦線」といった立派な看板は掲げているが、大衆の基盤は脆弱で、実態のほとんどない組織も多いが、他方では、ある一定の領域を長期にわたって実効支配している組織もある。1980年代後半から90年代前半にかけては、ウガンダ、エチオピア、エリトリア、ルワンダで、こうした「しっかりした」ゲリラ組織が政権の奪取に成功し、現在まで政権を維持している。特にウガンダの国民抵抗運動/国民抵抗軍（National Resistance Movement/National Resistance Army: NRM/NRA）の指導者であるヨウェリ・ム

セヴェニ (Yoweri Museveni), エチオピアのティグライ人民解放戦線 (Tigray People's Liberation Front: TPLF) の指導者メレス・ゼナウィ (Meles Zenawi), エリトリアのエリトリア人民解放戦線 (Eritrean People's Liberation Front: EPLF) の指導者イサイアス・アフェワルキ (Isias Afeworki) という3人の元ゲリラである支配者は, しばらくのあいだ, アフリカの「ニュー・リーダー」としてもてはやされた。

反政府武装組織の支配のあり方は, 理念的には敵である国家のそれとは様々な意味で対極に位置していても, その国の政治文化を共有しているために, 現実には相似形であることもあるだろう。反政府武装組織のリーダーたちが, 元々は政権側の政治家や高級官僚, あるいは高級軍人であった場合もあるから, これは当然のことかもしれない。いずれにせよ, 反政府武装組織における支配のあり方を考察することは, アフリカの個人支配を再考するうえでも意義があると思われる。

戦争を遂行している政治・軍事組織を統率するには, 強力なリーダーシップが必要であり, 個人支配は不可避であることは容易に想像がつく。しかし, その実態は現段階ではあきらかではなく, 今後の研究がまたれる課題は多い。アフリカにおける反政府武装組織の包括的な研究は, クリストファー・クラップハムが編集して数年前に刊行された『アフリカのゲリラ』(Clapham[1998]) を例外として, いまだ数少ない。ここでは, アフリカの個人支配というテーマを念頭におきながら, 検討されるべき4つの問題系を設定しておこう。

#### (1) ゲリラのリーダーという個人にかかわる問題系

ライフヒストリーなどの検討を通じて, リーダーという個人がいかにか形成されたかを, 政治文化と関連づけながら分析する。組織内外の人々は, 彼のパーソナリティについてどういうイメージをもっているのか。もし, カリスマ的な資質があるとしたら, その源泉はなにか。

(2) 組織の支配にかかわる問題系

意思決定のシステムが存在するか否か。存在するとしたら、個人支配と  
いかに並存しているのか。どのような重要な役職があり、その任命は、い  
かなる基準にもとづいておこなわれるのか。重要役職保持者とリーダーと  
の個人的関係。軍事部門と政治部門は区別されているか。それぞれの部門  
における上意下達と下からの情報や意見をくみとるシステムはいかなるも  
のか。

(3) 人々の支配にかかわる問題系

実効的支配をおこなっている領域があるか。あるとしたら、統治のシス  
テムと内実はいかなるものか。

ウガンダのNRM/NRA, エリトリアのEPLF, エチオピアのTPLFは、解  
放区を有し、そこで統治のシステムを確立して実効的支配をおこなった。  
3組織はいずれも国家権力を奪取し、ゲリラ組織の指導者は国家の指導者  
となった。現代アフリカのゲリラ組織のなかで、これらはむしろ例外かも  
しれない。軍事的な支配地域を有していても、統治より掠奪と搾取に専心  
する組織は多い。

(4) 紛争終結後の問題系

ゲリラ組織が政権を掌握した場合、あるいは権力分有によって政権に参  
加した場合、紛争終結後の支配のシステムは、紛争中の支配のシステムの  
影響をどの程度受けるのか。あるいは、戦時から平時への転換は、いかに  
おこなわれるのか。

たとえば、ウガンダ、ルワンダ、エチオピアおよびエリトリアという、  
ゲリラ組織が政府になった国家は、いずれも対外戦争を開始している。こ  
れは、戦時から平時への転換の失敗と考えることもできよう。

反政府武装組織に関するこうした諸問題の解明は、それ自体として重要な

研究上の課題であるばかりでなく、アフリカの国家における個人支配の問題を考察するうえでも、新たな視点をもたらすものと考えられる。以上の問題設定にもとづき、本章では、反政府武装組織のリーダーであったジョン・ガランを考察の対象にとりあげる。

## 第2節 ジョン・ガラン 独裁者が国民的英雄か

ジョン・ガラン スーダン人の多くは、敬愛の念をこめて「ドクトル・ジョン」と呼ぶ。また、SPLM/Aのメンバーからは「チェアマン」（議長）あるいは「シーインシー」（C in C, 最高司令官Commander-in-Chiefの略）と呼ばれている。私は、私にとって過去20年間、スーダン人の友人・知人やスーダン関係の研究者との話題の焦点であった。ガランを直接・間接に知っている人たちとの会話のなかで、彼は、卓越したタフな軍人・戦略家、弁舌の才にたけた演説者、老練で将来のヴィジョンを有する政治家である一方、冷酷な独裁者、自らの権威に挑戦する者を容赦なく粛清する男、自分と家族の蓄財と物質的安楽さに執着する腐敗した男としても語られていた。また、南部の分離独立ではなく、スーダン全体の解放と「新スーダン」の建設をめざす、彼の一貫した闘争目標は、南部人の多数にとっては受け入れがたいものであったが、これが単なる「たてまえ」なのか、「ほんね」なのかについても意見がわかれていた。

私自身、単独の会見ではなく、グループによる表敬訪問<sup>1)</sup>ではあったが、一度だけガランと会って言葉を交わしたことがある。場所は、スーダン政府との和平交渉がおこなわれていたケニアのナイヴァシャ(Naivasha)のホテルで、2004年1月のことだった。1月7日に、石油収入を北部と南部に平等に配分する「富の分有」合意書が調印された直後で、また政治色のない表敬団だったこともあり、約1時間にわたった面会は、とてもリラックスした友好的な雰囲気なかでおこなわれた。私は、ガランの人間的な魅力と、人心を

掌握する巧みさに強い印象を受けた。これまでに会った、アフリカの政治家のなかでも、最も「カリスマ」を感じた人物であるといつてよい。

政治・軍事組織の長であったジョン・ガランのリーダーシップには、個人支配の色彩が濃厚であったことは事実である。1983年から1991年にかけて、組織の最高機関は、約10数名の司令官（commander）から構成される政治軍事最高司令部（Politico-Military High Command: PMHC）であったが、実はほとんど召集・開催されたことはない。少なくとも、1987年3月以降は、4年以上にわたって開催されなかった。1991年は、SPLM/Aが最大の危機を迎えた年である。5月にはエチオピアの社会主義政権が崩壊し、同国から受けていた支援のすべてと、同国内に存在した基地や訓練所のすべてを失った。混乱のなかで、8月には、3名の司令官が独裁的体制を理由としてガランに反旗を翻し、組織は分裂するに至った。PMHCの会議が初めて開催されたのはこうした状況下であり、反乱には加わらなかった司令官たちの結束を再確認し、組織の指導部を再構築するためであった。

1994年には、第1回の国民会議（National Convention）が開催され、民主的な意思決定のシステムと解放区における文民行政のシステムが整備された。これは、SPLM/Aにとって画期的なできごとであった。しかし現実には、依然として権力は、ガランという個人に集中しているという状態が継続した。国民会議も、第2回が開催されることはなかった。「SPLM/Aのすべては、ガランの頭のなかと彼が持ち歩くブリーフケースのなかにある」、「彼が外遊で不在のときは、組織は麻痺している」といった表現は、平和交渉が本格化した2002年以降もよく耳にしたものである。

独裁者、人権侵害の責任者、戦争犯罪人としてのガランのイメージは、2005年1月のCPA調印の前後から、表面には出てこなくなる。それに代わって、民主的で多文化主義的な、人種、民族、宗教、ジェンダーのちがいがかわらず、すべての国民の平等が実現する「新スーダン」の設計者と建設者としてのイメージが優勢になった。南部だけでなく、スーダン全体のナショナルな指導者としての、ガランの影響力は増大した。こうしたポジティブなイ

メージの確立と流通の契機となったのは、アフリカ諸国の元首やアメリカのパウエル国務長官、それに多数のスーダン人が参加し、ケニアの首都ナイロビ（Nairobi）で、2005年1月9日に執行されたCPA調印式と、7月9日、ハルツームにおける第1副大統領就任式であった。就任式は、ガランの60年の人生における最高の舞台となった。22年ぶりに「敵地」ハルツームに乗りこんだガランは、「600万人」<sup>2)</sup>の国民の熱狂的歓迎を受けた。特筆すべきは、国民的な歓迎 南部人、北部人、西部人、東部人<sup>3)</sup>の関係なく、キリスト教徒もムスリムも を受けたことである。ガランがおこなった長時間の演説は、彼の人生にとっても、SPLM/Aの歴史にとっても、記念すべき瞬間であった（栗本 [2006a, 2006b]）。

就任式における演説（章末の資料1を参照）も、CPA調印式におけると同様、いやそれ以上に、感動的で格調高く、正義と平等、民主主義、多文化主義を基調とする「新スーダン」への夢を人々に与えるものであった（栗本 [2006a, 2006b]）。

この瞬間には、スーダンでは過去半世紀にわたって失敗が繰り返され、21世紀のポストモダンの現在では、すでに過去の夢であると多数が考えている、理想の国民国家の建設という事業が、スーダンにおいて実現されつつあるかのように思われた。ガランは、南部の英雄から国民的英雄に格上げされ、多くの南部人も南部の分離独立ではなく、統一スーダンの枠内での変革に期待を寄せるようになった。2003年から激化し、国際的な課題となっているダルフール紛争も、SPLMが加わった新しい「国民統一政府」のもとで、すみやかに解決されるという期待がふくらんだ。CPAにもとづき、3年後に自由で公正な総選挙が実施されたなら、SPLMが第一党の地位を獲得し、ガランがスーダン全体の大統領に就任するだろうという予想も、現実味をもって語られていたのである。

しかし、このユーフォリアの時期は、わずか3週間しか続かなかった。

7月29日、ガランはウガンダを訪問し、長年の盟友であるムセヴェニ大統領と会談した。これは、第1副大統領として初の外遊であった。ムセヴェニ

大統領専用のヘリコプターで、エンテベ (Entebbe) 空港をへて、南部スーダンのルンベックに向かった。しかし、ウガンダ・ケニア・スーダン国境付近で消息が途絶え、8月1日、死亡確認のニュースが世界中を駆けめぐった。

墜落の原因は、悪天候 (雷雨) と燃料切れであると報道されている。ガランと5名のボディガード、ヘリコプターの乗員と添乗者7名、合計13名の全員が死亡した。この事故をめぐるのは当初から「陰謀説」が流布している。SPLMの代表も加わったスーダン政府の事故調査委員会の報告書はいまだに発表されていない。ここでは、この問題には深入りせず、死後のSPLM/Aとメディア、およびスーダン人の対応を概観する。

さて、私は8月6日から1週間ナイロビに滞在し、その後19年ぶりにジュバを訪問したのち再びナイロビに戻った。その間、ケニアの新聞<sup>4)</sup>やテレビで、ガランの死について、あるいはガランという人間について、いかに報道されたかを観察する機会を得た。ひとことでいえば、ケニアのメディアは、「祀り上げ」といってもよいほどの賞賛の記事を報道していた。ガランに与えられた修辭は、「アフリカの偉大な政治家」、「ヴィジョンをもった男」、あるいは「モーゼ」などである。このうち、ガランを預言者的な地位にまで押し上げる「モーゼ」という概念は注目に値する。この言葉がいつから使われ始めたのか、正確なところはわからない。8月6日の葬儀において、未亡人のレベッカと英国国教会の大司教は、ガランをモーゼに喩えるスピーチをおこなったことはたしかである。

また、ナイロビの目抜き通り、ウフルハイウェイには、商品や会社の広告のかわりに、“A Man of Vision”, “We Remember John Garang” などのキャプションが付いた、巨大なガランの顔写真のパネルが掲げられ、夜間はライトアップされていた。この写真パネルの掲揚は、8月末まで続けられた。

さて、ケニアのメディアにおける報道は、ガランの賞賛一色であったわけではない。直接的な批判はなかったが、注意深く記事を読めば、ガランの隠れた側面が浮かび上がってくる。それは、後継者となった、それまではメディアへの露出度が低かったサルヴァ・キールの紹介記事においてである。新聞

では、サルヴァは、清潔で腐敗とは無縁な、「聞く耳をもつ」男として紹介されていた。たとえば、他のSPLM/A内部でのランクがサルヴァよりも低い司令官たちが、ナイロビに豪邸をもち、子弟をインターナショナルスクールや、さらには欧米の学校に通わせているのに対して、サルヴァは中産階級が居住するごく質素なアパートに住み、子弟は公立の学校に通っていることを伝える記事もあった。こうした「腐敗」の頂点に立っていたのがガランであり、彼の一家が、普通の南部スーダン人の想像をこえる、豪勢な生活を営んでいたことは、周知の事実である。新聞記事は、暗黙のうちに、ガランとサルヴァを対比し、後者を賞賛しているのである。

さらに8月8日の*The East African*紙に掲載された記事は、直接的にガランのリーダーシップのあり方、つまり個人支配を批判し、サルヴァを持ち上げるものであった。この記事は2004年11月末から12月初めにかけて、南部スーダンのルンベックで開催されたSPLM指導部の会議の議事録の一部であり、いわば内部資料の暴露記事である（後述）。

2004年11月、ガランとサルヴァのあいだで緊張関係が高まり、一時は反乱や分裂に発展するといううわさが流れ、インターネット上でも情報がとびかっていた。この危機は、ルンベック会議で一応の収束をみた。

新聞に掲載された議事録が信頼できるものとするれば、これはきわめて注目すべき重要な文書である。サルヴァは、きわめてオープン、率直にガランを批判しており、その要点はガランの個人支配と腐敗にある。また、出席したほとんどすべての司令官たちが、ガランにきわめて近いとみなされている者も含めて、異口同音にサルヴァの立場を支持したことも驚きである。*The East African*は、東アフリカ3国で販売されている、定評のある高級紙である。実はこの議事録は、すでにインターネット上では流布していたのだが、この時期にこの新聞が議事録を公表したことの意図はどこにあるのだろうか。他紙のガランとサルヴァに関する報道の内容も含めて、今後検討されるべき課題である。

さて、スーダン内戦については、数多の著書、論文、報告書が刊行されており、サイバースペース上の情報も大量にある。しかし、SPLM/Aを組織論的に論じたものは数少ない。ダグラス・ジョンソンらによる研究が例外である (Johnson [ 1998 ], Johnson and Prunier [ 1993 ])。また、ジョンソンの近著『スーダンの内戦』(Johnson [ 2003 ])は現在のところ、最も包括的かつ詳細な、質の高い内戦の研究であり、本研究にとっても重要な文献である。SPLM/Aの幹部であり、1991年には反主流派の旗揚げに参加したピーター・アドウオク・ニアバとラム・アコル<sup>(5)</sup>の著書は、内部者の視点で組織と内戦を分析したものとして貴重である (Nyaba [ 2000 ], Akol [ 2001, 2003 ])。いずれもガランに批判的な立場から書かれており、個人支配の実態を示すエピソードを多数含んでいる。ガラン自身の演説集は単行本として刊行されている (Garang [ 1992 ])。

ガランの死後、内戦をテーマとし、SPLM/Aとガランに焦点をあてた著作が少なくとも3冊刊行されている。2005年末、ガランの伝記的著作『ジョン・ガランとSPLA』がナイロビで刊行された。著者ジェイムズ・バンディ・シマニユラはケニア人のジャーナリストである。1985年から2004年のあいだに、数回にわたってガランにインタビューした。また、約20年にわたり一貫してスーダン内戦の取材を続けた。粗悪な編集の本であるが、ガラン自身とレベッカ夫人に関する貴重な情報が含まれている。また、南部スーダンで撮影された、ガランとSPLA幹部の写真も複数掲載されている (Shimanyula [ 2005 ])。南部スーダンのジャーナリスト、ガブリエル・アチョット・デン<sup>(6)</sup>とアロップ・マドゥット=アロップ<sup>(7)</sup>も、それぞれ著作を公刊した (Deng [ 2005 ], Madut-Arop [ 2006 ])。ガランのライフヒストリーとSPLM/Aの歴史に関する、他の文献では知りえない情報を含んでいる。マドゥット=アロップの著作のほうが、より学術的なスタイルで書かれている。

また、SPLM/Aの刊行物やホームページにも、彼の演説や談話が掲載されている。これらは重要な資料であるが、いずれも「公式」の文書であり、ガランの人となりやライフヒストリーに関する情報はほとんどない。本章では、

欧米やアフリカの新聞・雑誌に掲載されたインタビューなども含めて、必要と思われる資料は適宜利用した。

### 第3節 ライフヒストリー SPLM/A創設まで

先に述べたように、ジョン・ガランのライフヒストリーについては情報が十分ではない。生前によく知られていたことは、民族的にはディンカ(Dinka)人<sup>(8)</sup>であること、第1次内戦時(1955~1972年)<sup>(9)</sup>に、反政府武装組織アニヤニヤ(Anyanya)に参加しゲリラとして戦ったこと、戦後アメリカで博士号を取得したことくらいである。内戦勃発以来、最初の3、4年は、ガランはほとんどマスメディアに登場しなかった。初期の数少ないインタビューの例は、1986年9月、『ワシントンポスト』の記者、ハーデン(Blaine Harden)によるものである。カポエタ(Kapoeta)近郊の軍事キャンプの木陰で、2時間にわたってガランが自らと内戦について語った。タフな軍人と、アメリカで教育を受けたインテリという、2つの異なるイメージが混在している。

彼は、立派な体格の禿げ頭の男で、メノ派教徒のような、白髪まじりのあごひげをはやしている。彼はアイオワで博士号を取得し、会話に『アブリオリ』や『それにもかかわらず』(irrespective)といった単語を散りばめる。アメリカじこみの趣味で、新鮮なイチゴとピーナッツアイスクリームを好む。しかし、彼が指導する内戦は、南部スーダンを封鎖し、200万の人々が飢餓の危険に直面している。……彼は、肩に星と鷲の肩章のついた、アイロンをかけた迷彩服を着ていた。AK47突撃銃を持ち、腰のベルトには回転式拳銃と長いナイフをぶらさげていた。

『我々は後悔していない』。戦争によってひき起こされた飢餓と、先月撃墜した60名の乗客を乗せた民間機について述べた。……

ガランは、彼のゲリラ運動は、軍事的に敗北することは決してないし、

戦いはハルツームの政府が解体されるまで終わらないと述べた。

『我々はディナーに招待されるために戦っているのではない。我々の国の意思決定に効果的に参加し、ハルツームの政治権力の構造改革に参加するために戦っているのだ。我々の目的は 新スーダン の創造にある。この新スーダンは、我々が生きているあいだには達成できないかもしれない』  
 ……」( *Washington Post* , 1986年9月17日付け )

ガランの死後、彼のライフヒストリーに関する情報が、いくつかの新聞記事に掲載された<sup>(10)</sup>。また、2002年に刊行された、アメリカのジャーナリスト、スクロギンズ著『エンマの戦争』にも、略歴が記されている( Scroggins[ 2002: 177 ])。ディアスポラ・スーダン人が運営する平和構築のためのウェブサイトにも、簡単なライフヒストリーと年表が掲載された<sup>(11)</sup>。以下はその概要である。

1945年 6月23日 ジョングレイ (Jonglei) 地方のアジャックギエツト (Ajakgiet) 地域ワンクレイ (Wagkulei) 村で誕生。父マビオル・アテム・アロイ (Mabior Atem Aroy) , 母ガッグ・マルワル・クワル (Gag Maluwal Kwal) 。

1952年 トンジ (Tonj) 小学校入学。

1956年 ワウ (Wau) のブゼリ (Buseri) 中学校入学。

1960年 ルンベック高校入学 (中退)

1962年 ウガンダをへてタンザニアへ。海外留学試験合格。

1968年 アイオワのグリーンネル・カレッジ (Grinnell College) で経済学の学位取得。「本の虫」として知られていた。カリフォルニア大学バークレー校大学院で学ぶ奨学金を得るが、タンザニアに戻り、ダルエスサラーム大学で東アフリカ農業経済学を学ぶ。ムセヴェニと会い、親交を結ぶ。

1968~69年 アンヤニャ I に参加。ゲリラ兵士になる。

1972年 アディスアババ平和協定後、スーダン政府軍に統合 (大尉)。

- 1973年 タンザニアをへてアメリカにもどる。アイオワ州立大学で農業経済学の修士号取得。
- 1976年 ジュバでレベッカ・ニャンデンと結婚。
- 1978年 妻とアメリカへ。アイオワ州立大学で研究を続ける。
- 1980年 博士号(経済学)取得。帰国、ハルツーム大学農学部非常勤講師、陸軍大佐に昇進。
- 1983年 5月16日 SPLM/SPLA創設<sup>12)</sup>。
- 2005年 1月9日 CPA調印。7月9日、スーダン共和国第1副大統領就任。  
7月30日死去。子どもは2男4女。

ウェブサイトに掲載されたこの経歴が事実だとすると、まず注目されるのは、1950年代の当時としては、きわめてスムーズに学校教育を受けていることである。数百キロメートル以上離れた中学校と高校はもちろんのこと、小学校も生まれた村からはかなりの距離にある。おそらく、両親か近い親族に、教育の重要性を認識していた人物がいたのだろう。

1960年ころから第1次スーダン内戦が激化する。まだ10代の少年だったガランは、故郷をあとにして東アフリカを目指した。この時期からアメリカに留学するまでの事情は、まだあきらかにはなっていないが、2005年8月5日のケニアの日刊紙『デイリーネイション』紙に興味深い記事が掲載されている。ガクー・マテンガ(Gakuu Mathenge)記者が書いた「十代のときに初めて到着して以来、ケニアは第2の故郷」(“Kenya became second home since he first arrived as a teenager”)という記事である。記事の内容は、記者自身が2004年12月にナイヴァシャでおこなったガランとのインタビューにもとづいている。以下はその要約である。

ガラン少年はアニャニャに参加。しかし、ブッシュで戦うより、学校教育を受けたほうがよいとの助言を受ける。5人の少年とともに陸路、エチオピア・ケニア国境のモヤレ(Moyale)へ(1963年なかごろ)。植民地政府

の官憲に逮捕される。ナイロビへ護送。拘置所で、政治犯として収容されていた、のちにケニヤッタの政府で副大臣となるアーサー・オチュワダ (Arthur Ochwada) と知り合う。オチュワダは釈放後、内務大臣だったオギンガ・オディンガ (Oginga Odinga) と接触。オギンガの命令で6名の少年たちは釈放された。それだけでなく、オボテにウガンダ北部の難民キャンプに滞在できるよう依頼してくれた。教会NGOの助けによって、タンザニアで高校修了した。

タンザニアの高校教師たちは、ガランの学力の高さに驚いた。普通 (Ordinary) と上級 (Advanced) の2レベルの検定試験を同時に受験した。上級レベルを修了したのち、ナイロビのキベラ (Kibera) 地区にしばらく居住。1965~66年には、ニエリ (Nyeri) 県マティラ (Mathira) 地域のガトゥンアンガ (Gatung'ang'a) 高校で、数学教師兼校長として勤務した (*Daily Nation*, 2005年8月5日付け)。

スーダンを出出してケニアにたどり着いた年代に関して、さきほどの年表とのあいだに1年のずれがあるが、この記事は逮捕と拘留、オギンガ・オディンガとの接点、タンザニアの高校に進学できた経緯、高校卒業後、アメリカに留学するまでのあいだ、ケニアで高校教師をしていたことなど、短い記事のなかに、少なくとも私にとっては初めて耳にする興味深いエピソードが散りばめられていた。

ところで、上記の年表には重要な事実が欠落している。1978年にアメリカに渡ったのは、アイオワ大学の博士課程で学ぶことが当初の目的ではなく、スーダン陸軍から派遣されて、アメリカ陸軍の士官学校で研修するためであった。ジョージア州のフォートベニング (Fort Benning) にある歩兵学校である。一説には、ここで対ゲリラ戦 (counter-insurgency) の専門家としての訓練を受けたといわれている。また、1983年、SPLM/Aが創設された当時の彼の役職は、陸軍の参謀学校 (Staff College) 校長であった。

2005年末、ガランの伝記的著作『ジョン・ガランとSPLA』(Shimanyula [2005])

がナイロビで刊行された(第2節で紹介した)。以下は、この本でのガランのライフヒストリーに関する記述の要約である。

両親は普通の牧夫と農婦であった。しかし、厳格なキリスト教徒のしつけを受けた。学校に行けたのは、教育熱心だったイトコのおかげである。

17歳でアニャニャに参加するが、指導者たちの助言で、ルンベック高校に入学した。しかし、ストに参加し、退学処分になった。その後、タンザニアへ。……アメリカの陸軍歩兵学校は、200名中3番の成績で修了(Shimanyula [2005: 15-16])。

また、ガランが好んで引用した哲学者は、ソクラテスとヴォルテールだったという。現代の政治家では、キッシンジャーとJ・F・ケネディを賞賛していた。特にケネディの「民主党員、共和党員ではなく、アメリカ人でありたい」という文句にヒントをえた、「南部人、北部人ではなく、スーダン人でありたい」は、演説でしばしば使用された(Shimanyula [2005: 18-19])。

ガランの両親は、特に裕福であったわけでも、近代的な学校教育を受けていたわけでもない、普通の村人であった。したがって、彼を教育に向かわしめたのは、両親の影響ではなく、彼自身の意志だったのだろう。17、18歳の若者が、パスポートはもちろんのこと、身分を証明する文書ももたず、確たるあてもないまま、陸路でエチオピアを縦断してケニアに入り、さらにウガンダをへてタンザニアで教育の機会を得る。これは、20年以上たった第2次内戦時に、南部スーダンの多数の若者がたどることになる、苦難のルートである。ガラン自身も難民の経験をもっていたのだ。彼は、強固な意志と聡明さもちあわせた若者だったと思われる。

ガランがアメリカで学士号を取得したのは1968年、弱冠23歳のときであった。当時のスーダンはまだ第1次内戦のさなかであり、欧米の大学を卒業した南部スーダン人は、はたして何名いただろうか。アメリカでの修士号と博士号の取得、アメリカ陸軍の教育機関における専門的な訓練も含めて、同年

代の南部スーダン人と比べれば、ジョン・ガランはきわめて高度なキャリアの持ち主であったといえるだろう。

ガランが経済学を学んだグリーンネル・カレッジのウェブサイトには、ガラン関連の情報がいくつか掲載されている。平和のために努力している指導者という側面が強調されている。訪米時にカレッジを再訪したガランは、「グリーンネルのリベラルな価値観の影響を受けた」と語ったという。指導教官であった、アフリカ経済学の専門家ジャック・ドーソン（Jack Dawson）教授とは、個人的な友好を深めたらしく、1970年に教授がマケレレ大学の客員だったときには、カンパラ（Kampala）の夫妻の自宅に滞在したという<sup>(13)</sup>。博士号を取得したアイオワ州立大学については、2004年9月に再訪し、講演をおこなっている<sup>(14)</sup>。2006年に訪米したガランの未亡人、レベッカ・ニャンデンも、アイオワ州立大学で講演している<sup>(15)</sup>。

さて、青年時代のガランは、どのような政治的考えをもち、スーダンの状況をどう認識していたのだろうか。アメリカの大学を卒業後、彼はスーダンに戻り、ゲリラ運動に身を投じる。1972年、第1次内戦に終止符をうったアディスアババ平和協定に対して、ガランは公然と反対の立場をとり、戦争の継続を訴えたという（Scroggins [2003: 177]）。第1次内戦が、南部の分離独立という目標の達成に至らず、自治権の獲得という妥協によって終結したことへの不満は、第2次内戦（後述）への導線として重要である。しかし、こうした不満は、多数の南部人に共有されており、ガランの考えが特異であったわけではない。

ガランは、単なる南部スーダン民族主義者だったのだろうか。そうではなかったことを示唆するエピソードがある。CPA調印後の2005年2月、ガランはアメリカを公式訪問した。そのとき受けたインタビューのなかで、1974年の経験を回想する箇所がある。以下はその要約である。

1974年、南部出身の若いスーダン陸軍将校と、上官である北部出身の少佐が、世界中から集まった200名の将校とともに、ジョージアのフォートベ

ニングで軍事訓練に参加した。

訓練に先立って、ワシントンで1週間のオリエンテーションがあり、アメリカの歴史、憲法と政府について学んだ。あるセッションで、人数を数えるため、アフリカ人は起立するように求められた。2人のスーダン人は座ったままだった。中東出身者が起立を求められたときも2人は座っていた。

「最後には、私たち2人だけが残ってしまったのです」。南部人であるジョン・ガランはこう回想した。彼はのちに、スーダン政府に対する20年にわたる反乱を指導することになった。「私たちはあきらかにアフリカ人でした。……でもこれはアイデンティティの問題です。私たちは自分がだれであるのか知らなかったのです。あいまいさの背景にはこのことがありました」。先週、『ワシントンポスト』のインタビューのなかで、1956年に独立して以来、この国は「自分自身を発見し、魂をもつことに失敗したのだ」と述べた。「いくつかの政府が来ては去っていききましたが、スーダン人はアイデンティティを外部に求めたのです。キリスト教や、イスラーム国家のシナリオのなかで、アラブ世界に求めたのです。しかし、私たちは自分自身には、『私たちをスーダン人に行っているものはなにか』と尋ねはしなかったのです」( *Washington Post*, 2005年2月11日付け )<sup>16)</sup>。

これは興味深いエピソードである。ガランは、自分自身はもちろんのこと、北部人の少佐もアラブ人ではなくアフリカ人であると述べている。スーダンの抱える問題は、「南部問題」ではなく、スーダン人全体のアイデンティティの問題であるという認識は、21年後の言葉で語られている。しかし、1974年の経験が、のちにこうした認識が形成されるきっかけになったことはまちがいないだろう。

南部スーダンの分離独立ではなく、スーダン全体の変革を求める政治的な姿勢は、1980年ころにはすでに明確になっていた。博士号を取得し、アメリカから帰国後、ガランは南部人のインテリや将校のインフォーマルなグルー

プと付き合い、政治の議論を続けたという。ハルツーム大学の学生だったリエック・マチャル (Riek Machar) は、ある日そうした集まりに参加し、強い印象を受けた。リエックは、イギリスで博士号を取得したのち、SPLM/Aに参加する。司令官の肩書きを得るが、1991年にはガランに叛旗を翻し、SPLM/Aナシル派を結成した。のちにスーダン現代史の主役のひとつとなるヌエル (Nuer)<sup>(17)</sup> 人の男は、1980年ころには、まだ目立たない学生であった。それに対してガランは、博士号ももつ陸軍大佐という、輝かしい経歴の持ち主であった。リエックが参加した集まりで、ガランは以下のように語ったという<sup>(18)</sup>。

「『北部人の多数はジャラバ<sup>(19)</sup>』であるという見方をやめるべきだ。北部人の多数は、南部人と同様、ハルツームのエリートに疎外されている。ただし、宗教のため、問題を適切に認識することができていない。いわゆる南部問題は実はハルツームの問題なのだ。ほとんどのスーダン人は肌の黒いアフリカ人である。しかし、国の富はごく少数のアラブの子孫たちに握られている。ほとんどの人が、エスニックおよび宗教的な所属を超えてものごとを見ることができない国で、ガランは階級と経済の用語でものごとをとらえていたのである」( Scroggins [ 2003: 177-178 ])

このエピソードは、ガランの政治的ヴィジョン 「南部問題」はスーダン全体の問題であり、スーダン人のアイデンティティの問題である が、1980年の時点ですでに明確に形成されていたことを示しており、重要である。若きリエックは、ガランの話に蒙を啓かれる思いをしたことだろう。しかし同時に、彼はガランの尊大な態度には苛立ちを感じた。他のだれもがアラビア語を使っているのに、ガランは英語かディンカ語でとおした<sup>(20)</sup>。リエックは、ガランは典型的な「帰国者」<sup>(21)</sup> だと思った ( Scroggins [ 2003: 178 ])

## 第4節 ボルの反乱とSPLM/SPLAの誕生

### 1. ボルの反乱と「地下組織」

スーダンの第2次内戦は、1983年5月17日に生じた「ボルの反乱」(Bor Mutiny)から始まった。SPLM/Aにとって、この日は重要な記念日になっている。しかし、1983年5月の時点では、SPLM/Aという組織は、まだ存在していなかった。この反乱がどの程度計画的であったのか、そこにおいてジョン・ガランはいかなる役割をはたしたのかという問題の考察は重要な意義をもっている。さらに、ボルの反乱から、SPLM/Aの創設に至る3、4カ月のあいだに、いったいなにが生じ、いかなる経緯でガランが最高指導者に就任したのかも、重要な課題である。

まず5月17日にボルで生じた事実について確認しておこう。ボルに駐留する第105大隊の将兵の多数は、元アニャニャの兵士であった。大隊の指揮官も、元アニャニャのケルビノ・クワニン・ボル(Kerubino Kuanyin Bol)少佐だった。給与の遅配を直接の原因として、3月以降将兵のあいだで不穏な動きがあり、ジュバのスーダン陸軍本部は、討伐部隊を派遣した。5月17日早朝、討伐部隊と大隊は交戦状態に入った。激しい戦闘のなかで、ケルビノ少佐は負傷した。同日、政府軍の別部隊は、ポチャラ(Pochalla)とピボール(Pibor)に駐屯していた第105大隊の部隊を攻撃した。18日、第105大隊の将兵は、ボルや他の駐屯地を撤退し、エチオピア国境を目指して原野のなかの行軍を始めた。年次休暇でボルに滞在中であったガランとその家族は、大隊の将兵たちとは別ルートで、エチオピア国境に向かった。

アヨッド(Ayod)には、ウィリアム・ニュオン・バニイ(William Nyuon Bany)少佐指揮下の第104大隊が駐屯していた。マラカル(Malakal)からボルに派遣された政府軍部隊がアヨッドに到着したとき、ニュオンは計略を用いて、派遣部隊の北部人将校全員を殺害し、武器弾薬を奪ってエチオピア領内に向け

て撤退した。ワート (Waat) に駐屯していた第104大隊の中隊も、同様に撤退を開始した (Madut-Arop [2006: 53-54])。

第1次内戦の終結と南部地方政府の樹立から約10年が経過したにもかかわらず、南部の復興と開発は停滞し、南部人のあいだに大きな不満が渦巻いていたことはたしかである。特に旧アニャニャのメンバーとして第1次内戦を戦い、戦後はスーダン政府軍や警察の将兵や南部政府の行政官になった人たちと、戦後に中等・高等教育を受けた若者たちのあいだで、現状に対する不満は強かった。こうした広範な不満が、第2次内戦の間接的原因であることについては異論がない。また、1983年当時のスーダン陸軍本部は、南部に駐留する元アニャニャの将兵を含む諸大隊を、北部に配置転換し、南部には新たに北部人を中心とする大隊を派遣する計画を進行させており、こうした事情が反乱の背景にあった。ケルビノ少佐とニュオン少佐は、ともに元アニャニャのメンバーであり、両大隊の将兵の多数も元アニャニャのゲリラであった。しかし、ボルの反乱からSPLM/A創設に至る一連の出来事が、偶発的だったのか、ガランたちによって計画されたものだったのかについては、まったく異なる2つの見方がある。それによって、反乱勃発当時、ガランがボルに滞在していたことの真の意図の解釈も異なってくる。この問題は、反乱と政権奪取を計画していた「地下組織」が存在したかどうかにもかかっているのである。

内戦とSPLM/Aに関する著書を刊行した2人の南部スーダン人ジャーナリストは、いずれも「地下組織」の存在を前提としている。ガランを中心に、アディスアババ平和協定後の体制に不満を抱く元アニャニャの兵士たちのあいだに、武力による南部地方政府の政権奪取を目指す秘密組織が存在した。ケルビノ・クワニン・ボル、ウィリアム・ニュオン・バニィ、サルヴァ・キールは、この組織の主要メンバーであった。また、すでにスーダン政府に対する武力闘争を開始していたゲリラの諸グループ アニャニャIIと総称される とも連絡をとりあっていた。

ガブリエル・アチュッス・デンによると、地下組織は、アディスアババ平

和協定調印の直後、ガランを指導者として、スーダン政府軍に吸収されたア  
ニャニャ将兵によって結成された。目的は、スーダンに社会主義政権を樹立  
することであった。サルヴァは公安（セキュリティ）の責任者、チャガイ・ア  
テム・ビアル（Cagai Atem Biar）が連絡・連携の責任者であった。彼らは、  
1983年の8月18日にジュバで武装蜂起することを計画していた。年次休暇中  
のガランは、チャガイを帯同してハルツームからジュバをへて、5月13日にボ  
ルに到着した。しかし、ボルにおける事態の進展は急で、ガランは当初の計  
画を変更せざるをえず、5月18日に、ジュバではなくボルで武装蜂起を開始す  
ることに決定した。17日に、ジュバから派遣された政府軍と第105大隊が交戦  
状態に入ったので、この決定も反故になってしまった。政府軍を撃退したあ  
と、第105大隊は、すでにアニャニャ II のあるグループが本拠を構えていた、  
エチオピア領内のガンベラ（GambelaもしくはGambella）へと撤退したのである。  
ガランとチャガイ、およびガランの家族は、大隊とはべつに、最初は自動車  
で、あとは徒歩でガンベラへと向かった。途中で、サムエル・ガイ・トゥッ  
ト（Samuel Gai Tut）指揮下のアニャニャ II 部隊の歓迎を受け、5月27日にエ  
チオピア国境に到着した（Deng [ 2005: 121-128 ]）。

こうした見方に対して、SPLM/Aの主要メンバーではあるが、政府軍将校  
というキャリアはもたないピーター・アドゥオク・ニアバとラム・アコル  
の両者は、いずれも地下組織の存在について否定的である（Nyaba [ 2000: 28-  
30 ], Akol [ 2001 ]）。ヨーロッパの大学で博士号を取得したインテリである両  
者は、ガランの独裁体制と、解放運動における軍事主義の優越に対して批判  
的であった。特にケルピノとニューオンという、SPLAという軍事組織の中核を  
担った、しかし教育水準はきわめて低い、ウォーロード的な2人の司令官に  
対しては評価が厳しく、明確な政治的目標をもった地下組織のメンバーであ  
りえたはずがないという前提に立っているようだ。

ボルの反乱以前の地下組織の存在の真偽、したがってSPLM/Aの創設がど  
の程度計画されたものであったかの判断については、今後新たな資料や証言  
の発掘を待ちたい<sup>(22)</sup>。

## 2. SPLM/SPLAの誕生

1983年5月末から7月にかけて、南部スーダンを基盤にした反政府運動を担うべき指導者たちが、続々とエチオピア西部のガンベラに集結した。彼らは以下の3つのグループに大別することができる。

- (1) ボルの反乱にかかわった政府軍の将校たち ジョン・ガラン、ケルビノ・クワニン、ウィリアム・ニュオン。
- (2) すでに反政府武力闘争を開始していたアニヤニヤIIの指導者たち サミュエル・ガイ・トゥット、アクオット・アテム (Akuot Atem)、ウィリアム・アブダラ・チュオル (William Abdalla Chuol)、ゴードン・コン (Gordon Kong)。
- (3) 第1次内戦の時代から活動していたヴェテランの政治家たち ジョセフ・オドゥホ (Joseph Oduho)、マーティン・マジエル・ガイ (Martin Majiel Gai)。

第1のグループの指導者はガランであることは疑いの余地がなかったが、第2、第3のグループのなかには、ガランより政治的キャリアがながく、国内外での知名度も高い人たちがいた。第2グループの4名の指導者たちは、いずれも元アニヤニヤのメンバーである。ガイ・トゥットとチュオルはスーダン政府軍に統合され、それぞれ中佐と少佐に昇進した。前者は1974年に解任されたが、後者はそれに抗議して辞任した。のちにガイ・トゥットは、南部地方政府の大臣を務めている (Alier [1992: 273])。アクオットは1950年代に行政官としてキャリアを開始し、第1次内戦終結後は、ガイと同様、南部地方政府の大臣も務めた (Madut-Arop [2006: 81])。コンは政府軍には参加せず、マラカルで労働者として働いたのち、エチオピア領内のヌエルランドに居住していた。そこでアニヤニヤIIにリクルートされる (Alier [1992: 275])。

第3グループのオドゥホは、トリット出身のロトゥホ (Lotuho) 人で、1960年代初めに、アニヤニヤの政治部門であるSANU (Sudan African Nationalist

Union) を結成した指導者のひとりである (Johnson [ 2003: 31-32 ])。1972年以降は、南部地方政府の大臣や南部議会の議員を歴任した。マジエルはボル出身のディンカ人であり、オドゥホと同様、南部の大臣や議員を歴任したほか、判事の職にも就いていた。

なぜ、複数いた候補のなかからガランが新組織の指導者に選ばれたのか。ガランが南部スーダンの分離独立ではなく、スーダン全体の解放を目標に掲げており、それゆえにエチオピア政府の強力な支援を受けたことが主要な要因であったという認識は、ひろく共有されている。ガランだけが高度な高等教育を受けていたことも要因のひとつだっただろう。当時の社会主義エチオピア政権にとって、アメリカの影響下にあったスーダンのヌマイリ (Jaafar Mohamed Nimeiri) 政権は敵であった。したがってスーダンの反政府組織を支援する理由があったが、エチオピアからの分離独立を目標に掲げる反政府組織と対峙していた状況のゆえに、南部スーダンの分離独立を目指す組織は支援できなかったというわけである (Johnson and Prunier [ 1993: 125-126 ] Johnson [ 2003: 62-63 ] )。

指導権争いとエチオピア政府の関与を含む SPLM/A 設立時の詳細は、マドゥット = アロップの著書に記されている (Madut-Arop [ 2006: 67-74 ])。それによると、エチオピア政府は陸軍参謀総長のタスファイ・メスフィン (Tesfay Mesfin) 将軍をガンベラに派遣した。将軍は、アクオット、ガイ・トゥット、ガラン、オドゥホなどを含む南部スーダン人のグループと会見し、グループの目的を記した文書を提出するように要望した。アクオットを中心に作成され、南部スーダンの解放と独立を目的とした文書は拒否されたが、ガランが起草した文書は受け入れられた。この文書の要点は3つあった。(1) 周辺化された地域に平等と正義を保障する新スーダンの建設のために闘うこと、(2) 社会主義システムの採用、(3) 南部スーダン各地に分散した兵力の再編成と訓練、である。この文書は改訂され、1983年7月に SPLM/A の綱領として発表された。ここに、SPLM/A は正式に発足したのである。

綱領の発表後も指導権をめぐる抗争は継続した。アクオットたちのグルー

プは、アクオットをSPLM/Aの議長とし、ガイ・トゥットを防衛大臣、オドゥホを外務大臣、マジエルを法務大臣、ガランを参謀長とする「新政府の内閣」の樹立を一方向的に宣言した。この問題が未解決のままの状況下で、ガランを代表とするSPLM/Aの代表団は、首都アディスアババ南方の町ナザレス (Nazareth) でエチオピアの国家元首メンギスツ (Mengistu Haile Mariam) 議長に面会した。会議には、メスフィン参謀総長も同席した。メンギスツは綱領に対する満足感を表明し、新組織を全面的に支援することを確約した。そして、エチオピア政府と今後交渉するさいのSPLM/A側の唯一の代表としてガランを指名した。代表団がナザレスから戻ると、南部スーダンのリーダーたちはガンベラ地方のイタン (Itang) に集結し、内部の抗争を調停するために会議を開催した。しかし、会議は決裂し、アクオットとガイ・トゥットは配下の部隊を率いてスーダン領内へと撤退した。ガランを支持するウィリアム・ニュオンの部隊が、イタンに駐屯していたゴードン・コンを攻撃したので、コンと配下の部隊もアクオットとガイに続いた。

反ガラン派が去ったあと、ガランがSPLM/Aの議長兼総司令官、ケルビノが副議長兼副総司令官、ニュオンが参謀長、サルヴァが副参謀長に任命された。第3のグループからは、オドゥホとマジエルが、それぞれSPLMの外交と法務の責任者となった。

アチョット・デンによる記述も、おおむね上記と一致している (Deng[ 2005: 129-141 ])。ただし、デンによると、ガランとサルヴァは、6月14日にイタンで会合をもち、SPLM/Aの設立を宣言している。この会合には、第105大隊の下士官55名が参加した (Deng[ 2005: 129 ])。マドゥット=アロップが記述していない細部の情報を補足しておくとして、メンギスツに面会するため、4名の代表団 ガラン、サルヴァ、アクオット、ガイ がアディスアババに向かったのは7月10日のことだった。オドゥホは、ウガンダから直接アディスアババに向かい、11日に合流した。彼らは綱領を作成し、メンギスツに会ったあと、8月9日にガンベラに戻った。アクオットとガイが、「新政府」の樹立を宣言したのは、そののちのことであった (マドゥット=アロップによれば、そ

れ以前の出来事)。両者がスーダン側へと撤退したのは9月2日のことであった (Deng [ 2005: 135-137 ])

以上のように、SPLM/Aは、ある筋書きにもとづき、その通りに誕生したわけではない。ボルの反乱からその誕生までには約3カ月を要し、その間、リーダーシップと基本路線をめぐる抗争が繰り返されたのである。リーダーたちの3つのグループのうち、権力闘争に勝利したのは、エチオピア政府の支援を受けた第1のグループであった。第3グループは第1グループに参加したが、第2グループは完全に排除され、SPLM/Aと決別することになったのである。

ところで、SPLM/Aの「綱領」<sup>23)</sup>は、社会主義的なイデオロギーにもとづいている。たとえば、第7章「SPLAとSPLMの創設と目的」では、運動の目的が以下のように規定されている。

「南部の運動を、南部と私利私欲だけにかかわった反動派に指導された反動的運動から、国全体を社会主義的に変革することに献身する革命派に指導された進歩的運動に変革すること」(「綱領」、18ページ)

初期SPLM/Aの社会主義的傾向は、当時のエチオピアの社会主義政権の影響であったとみなされている。ガランを含め、運動の指導者たちのなかには思想的なマルクス主義者は存在しなかった。むしろ、当初運動に参加した社会主義者や共産主義者は、しだいに排除されていった。社会主義の用語は単なる方便だったのである。冷戦構造が終焉を迎え、1991年にエチオピア社会主義政権が崩壊した以降、SPLM/Aは、こうした用語を使用しなくなった。しかし、メンバーのあいだでは、少なくとも1991年までは「同志」「革命的」「反動的」「ブルジョワ的」といった用語が日常的に使用されていた。これらは、敵と味方を弁別するために使用され、ガランと敵対するグループは、南部人、北部人にかかわらず反動、ブルジョワというレッテルを貼られることになったのである。

### 3. アニャニャⅡとの抗争

新生SPLAにとって最初の敵は、実はスーダン政府軍ではなかった。1983年9月から3年以上にわたって、南部人の反政府武装組織であるアニャニャⅡとのあいだで、激しい戦闘をくりひろげた。

先に述べたように、アニャニャⅡの指導者たち サミュエル・ガイ・トゥット、アクオット・アテム、ウィリアム・アブダラ・チュオル、ゴードン・コン は、新組織SPLM/Aのリーダーシップから排除されてしまった。彼らとガランたちとの対立は内戦へと発展した。

1983年9月、エチオピア政府軍の支援のもと、ガランの軍勢はガイ・トゥットの軍勢を攻撃した。後者はスーダン領内に撤退した。その後もSPLAの攻勢は続き、1984年3月、ガイ・トゥットは戦死した。アクオットは、1984年8月、部下だったチュオルに殺害されたといわれている。チュオルは、スーダン政府から武器弾薬の支援を受け、SPLAとの戦闘を継続したが、1985年8月に戦死した<sup>(24)</sup>。3人の指導者の死後も、アニャニャⅡは、スーダン政府の強力なバックアップのもとSPLAと戦い続けた。しかし、1988年、当時最も影響力のあった司令官ゴードン・コンとSPLAとのあいだで合意が成立し、アニャニャⅡの将兵の多数はSPLAに合流した。主要な役割を果たしたのは、ヌマイリ時代に上ナイル（Upper Nile）州の知事だったマシューズ（D. K. Mathews）であった（Johnson and Prunier [ 1993: 126-130 ], Alier [ 1992: 275 ]）。

アニャニャⅡの4名の指導者たちのうち、アクオット以外はヌエル人である。アニャニャⅡは、報復として、SPLA参加を目指して徒歩でガンベラに向かう主としてディンカ人の若者たち数千名を殺害した。SPLM/A初期におけるアニャニャⅡとの抗争は、内戦の一側面が、ディンカ人対ヌエル人のエスニックな紛争という形態をとるようになる原因となったとみなされている。

しかし、スーダン政府の副大統領や南部地方政府の大統領など要職を歴任したヴェテラン政治家であるアベル・アリエル（ディンカ人）と、スーダンの

専門家として評価がたかい歴史家ダグラス・ジョンソンは、SPLAとアニャニャⅡの対立を、ディンカ対ヌエルという図式で理解するのは不適切であると論じている。アリエルによれば、ライバルであったアテムとガランは同郷のディンカ人であり、そもそも個人のレベルで、ディンカ、ヌエルの民族的な境界はあいまいであった。チュオルとニュオンは、生まれはディンカ人だが、のちにヌエルとなった。ガイ・トゥットも、もともとの出自はディンカである(Alier[ 1992: 272-273 ])。ジョンソンは、ヌエル人は、SPLAとアニャニャⅡのどちらにも参加しており、両者の戦いは、むしろヌエルどうしの内戦というかたちをとったと指摘している (Johnson [ 2003: 65-66 ])。

内戦の一局面が、ディンカ対ヌエルという明確なかたちをとるようになるのは、1991年のSPLM/A分裂以降のことであった。

## 第5節 権力機構と権力闘争 初期SPLM/SPLAとジョン・ガラン

### 1. 権力機構と指揮系統

1983年に創設されたSPLM/Aという政治・軍事組織には、10年以上にわたって意思決定の制度は存在せず、議長兼最高司令官であるガラン個人にすべての権限が集中していた。また、軍事部門であるSPLAが卓越し、政治部門のSPLMはきわめて弱体であった (Nyaba [ 2000: 45 ], Akol [ 2001 ])。特に1991年までは、運動のメンバーにとってガランは近寄りたがい存在であった。実際に、アディスアババ、ガンベラ地方の基地、上ナイル地方のエチオピア国境近くに位置するボマ (Boma) 高原にあった本部、エクアトリア (Equatoria) 地方の前線とのあいだを頻繁に移動し、さらには友好諸国への外遊も行っていたため、指導部に近い人々にとっても、ガランに面会するのは容易ではなかった。運動の政策、財政、軍事上の戦略と作戦に関する説明責任と透明性

は、きわめて低かったのである (Douglas [ 2003: 92 ] )。

制度的には、政治・軍事最高司令部( Politico-Military High Command<sup>25</sup>: PMHC )が最高意思決定機関であった。設立当初のPMHCメンバーは、ジョン・ガランをはじめとする5名の元政府軍将校であった。以下では、SPLM/Aの指導部を形成したこの5名を「トップ・ファイヴ」と呼ぶ。ガラン以外の4名は、ケルピノ・クワニイン・ボル、ウィリアム・ニュオン・パニィ、アロック・トン・アロック (Arok Thon Arok )、そしてサルヴァ・キール・マヤルディットである。5人とも元アニャニャ将校で、第1次内戦終了後はスーダン陸軍に統合された。1983年時点での階級は、ガランが大佐、ケルピノ、ニュオン、アロックは少佐、サルヴァは大尉であった。ヌエル人であるニュオン以外の4名はディンカ人である。

SPLM/Aの設立当初から、ケルピノはガランにつぐ序列第2位、つまり副議長兼副最高司令官の地位にあった。1985年末か86年初めにPMHCの5名は一堂に会した。ニュオンは参謀長に、サルヴァは作戦・治安担当の副参謀長、アロックは行政と兵站担当の副参謀長に任命された (Nyaba [ 2000: 47 ] )。

1986年7月、新たに5名がメンバー補 (alternate member )としてPMHCに追加された。ジェイムズ・ワニ (James Wani, 大尉)、ラム・アコル (少佐)、リエック・マチャル (少佐)、ユースフ・クワ (Yusuf Kuwa, 大尉)、ダニエル・アウェット・アコット (Daniel Awet Akot, 中佐)の5名である (Akol [ 2001: 63 ] )。1987年の段階では、メンバー補は12名に増加していた。追加された7名は、マーティン・マニエル・アユエル (Martin Manyiel Ayuel, 中佐)、クオル・マニャン (Kwol Manyang, 中佐)、ガレリオ・モディ (Galerio Modi)、ジョン・クラン (John Kulang)、ルアル・ディーン・ウォル (Lual Diing Wuol)、ヴィンセント・クワニィ (Vincent Kuany)<sup>26</sup>である (Madut-Arop [ 2006: 195 ] )。

12名のメンバー補を加えることによって、PMHCは、権力基盤の正統性と代表性を高めようとしたのだと思われる。たしかに、狭いサークルであったトップ・ファイヴに比べると、12名のメンバー補の出身と経歴は多様である。

たとえば、アニャニャとスーダン政府軍における軍人の経験のない、ともに工学博士であるリエック・マチャルとラム・アコルが含まれている。また、かつての南部3州（バハル・アル・ガザル [ Bahr al Ghazar ], 上ナイル, エクアトリア）別にみると、初めてエクアトリア州出身者2名が加わった（ジェイムズ・ワニとガレリオ・モディ）。北部コルドファン（Northern Kordofan）州のヌバ（Nuba）人であるユースフ・クワがメンバー補になったことも注目される。しかし、エクアトリアの観点からすると、常任メンバー5名とメンバー補12名、計17名のうち、同州出身者が2名というのは、いかにも少なすぎる。また、全体的に「ディンカ人」の優越という、構造は不変であった。常任メンバー5名のうち4名、ナンバー補12名のうち4名はディンカ人であった（ダニエル・アウェット、クオル・マニャン、マーティン・マニエル、ルアル・ディーン）。民族集団別にみると、ディンカ人につぐ地位を占めていたのは、常任メンバー1名（ニュオン）とメンバー補3名（リエック、ジョン・クランとヴィンセント・クワニ）を輩出したヌエル人である。

メンバー補の加入を決定したPMHCの会議は1987年3月にガンベラで開催された。これにはトップ・ファイヴの全員が参加したが、これ以降数年にわたってPMHCの会合は1度も開催されることがなかった。ようやく開催されたのは、パトロンであったエチオピア社会主義政権の崩壊後、上ナイル地方のナシル（Nasir）に滞在していたリエック・マチャルを指導者とする3名の司令官が、ガランに叛旗をひるがえしたことによる組織の分裂という、最大の危機を迎えた1991年の9月であった。開催場所は、当時、ガランを指導者とする主流派の本拠地のひとつであった、東エクアトリア地方のトリット（Torit）においてであった。この会議には、リエック、ラム・アコル、ゴードン・コン<sup>(27)</sup>の3名は、もちろん参加しなかったが、残りのメンバー10名のうち、前線のヌバ（Nuba）山地にいたため、交通手段の問題のため参加できなかったユースフ・クワを除く、9名が参加した（Rolandsen [ 2005: 55 ], Madut-Arop [ 2006: 276 ]<sup>28)</sup>）。

軍事組織としてのSPLAは、いかなる指揮命令系統を確立していたのか。当

初は、作戦地域をゾーンに分類し、各ゾーンに司令官（Zonal Command）を任命していた。1986年12月31日、SPLAは議長兼最高司令官命令によって、以下のような5つの「軸」(axis)から成る、新たな指揮系統を導入した。PMHCの常任メンバー5名、つまり「トップ・ファイヴ」のそれぞれが各軸の指揮を執った。1987年末までに、レンクからニムレ（Nimule）に至る、南部スーダンのナイル東岸の広大な地域を解放することが目的であった。ガラン自身は、戦略的に最重要の第1軸を直接指揮した。各軸を指揮する司令官は、最高司令官（ガラン）に直接報告する義務を負っていた（Akol [ 2001: 214-215 ], Madut-Arop [ 2006: 196 ]）。

第1軸 ガランが直接指揮。エチオピア、ケニア、ウガンダと国境を接するナイル東岸地域。のちに西エクアトリアまで拡大され、ザイール、中央アフリカとの国境地帯も含むようになる。PMHCメンバー補の、マーティン・マニエル、クオル・マニャン、ルアル・ディーンが補佐。

第2軸 ケルビノが指揮。南青ナイル地方。ジョン・クランとガレリオ・モディが補佐。

第3軸 ニュオンが指揮。上ナイル地方の東部と北部。ラム・アコルとゴードン・コンが補佐。

第4軸 サルヴァが指揮。上ナイル地方の南部。第1軸の北方。

第5軸 アロックが指揮。上ナイル地方の中央部。第3,4軸を支援。

以上の「軸」とはべつに、ゾーン司令官指揮下の以下のような「独立軍事地域」( independent military area )も設置された（ Madut-Arop [ 2006: 197-198 ]）。

- ベンティウ（Bentiu）独立軍事地域 上ナイル地方の西部、油田地帯。  
ゾーン司令官はリエック。
- パハル・アル・ガザル独立軍事地域 ゾーン司令官はダニエル・アウェット。

- ヌバ山地独立軍事地域　　ゾーン司令官はユースフ・クワ。
- ダルフル（Darfur）独立軍事地域　　ゾーン司令官はダウド・ボラッド（Daud Bolad）<sup>29</sup>。
- ハデンドワ（Hadendowa）独立軍事地域　　ゾーン司令官はマフムード・バザラ（Mahmoud Bazara）。

これは旧来のゾーン・システムの存続である。5つの独立軍事地域のうち、3つは北部スーダンに位置している。このうち、ヌバ山地を除くダルフルとハデンドワ<sup>(30)</sup>は、ほとんど名目的な存在にすぎず、軍事作戦はほとんど展開されなかった。

1987年末、ガラン自身が指揮をとる第1軸は、SPLA創設以来最大規模の攻勢を開始した。この作戦は、それまでのゲリラ戦だけでなく通常戦争の形態もとり、政府軍が駐屯する東エクアトリア（Eastern Ekuatoria）地方の主要都市の攻略を目指した。1988年1月、手始めにSPLAは、ケニア・ウガンダ国境に近いカポエタを占領した。しかし、ラジオSPLAでは、第1軸ではなく、「輝星作戦」(Bright Star Campaign)の成果として報告された(Akol[ 2001: 216 ])。その後、輝星作戦はめざましい戦果をあげ、東エクアトリアの都市や政府軍駐屯地をつぎつぎと攻略していった。

1989年9月21日、議長兼最高司令官は新しい命令（“Organization no.3”, no. 185/9/89）を発し、従来の5軸を廃し、以下の3つからなる「フロント」(Front)を設立した(Akol [ 2001: 216 ])。

第1フロント　　ガランの指揮下。Phase 1：ジェベル（Jebel）川の東、ソバット（Sobat）川の南、エチオピア・ケニア・ウガンダ国境。Phase 2：ソバット川とジェベル川北方の上ナイル地方。このフロントでの軍事行動を輝星作戦と呼ぶ。

第2フロント　　参謀長、ニュオン指揮下。青ナイル地方、北緯14度まで。このフロントでの軍事行動は新フンジ作戦（New Fung Campaign）である。

第3フロント 副参謀長，サルヴァ指揮下。レイク地方。このフロントでの軍事作戦は，コン・アノック作戦（Kon Anok Campaign）である。ガランは，さらに総本部（GHQ）と訓練所を管轄する。

ラム・アコルは，こうした指揮系統の改変の恣意性と，ガラン個人への権力の過度の集中をきびしく批判する。議長兼最高司令官は，軍隊の日常的行政を管轄すると同時に，軸，フロント，輝星作戦などの司令官になることを望む。これは，軍事的に非合理的である。ガラン以外のPMHCのメンバーや他の司令官，司令官補は，適切な任務と権限を与えられていない。人的資源の活用における誤りは，軍事面だけにとどまらない。SPLM/Aには，多数の軍隊・警察・監獄・野生動物保護官の将校，医師，技師，地方政府行政官，法律家，経済学者などが参加したが，彼らの知識と経験が，運動のために活用されることはなかった。活用するための組織構造も欠如していたのである（Akol [ 2001: 218-219 ]）。

ラム・アコルによれば，報告系統にも矛盾があった。1987年3月，議長兼最高司令官は，ジェイムズ・ワニ，ユースフ・コワ，それにラムの3名を，新たにゾーン司令官に任命し，直接指揮系統を説明した。それによると，作戦に関する報告は，議長と作戦・治安担当の副参謀長に，行政と兵站に関する報告は議長と行政・兵站担当の副参謀長にするようにとのことだった。ラムは，なぜ二重の報告が必要であり，かつ参謀長が除外されているのか疑問に思った。なお，当時の命令と報告は，無線によっておこなわれていた（Akol [ 2001: 219 ]）。

ケルビノの拘禁も，直接の原因は報告系統をめぐる問題だった。1987年7月29日，ケルビノは全司令官に無線でメッセージを送り，指揮系統を守って，直接議長に報告するのではなく，副議長兼副最高司令官である彼に報告するように命じた。これに対してガランは3日後に反応し，副最高司令官は精神的肉体的に重病であり，医療休暇を与えると無線メッセージで決定を告げた（Akol [ 2001: 220 ]）。

しかし、同年12月、ケルビノの失脚後、事実上の序列第2位であったニュオン参謀長が、作戦に関する情報は、ただちに私に送るように命じたとき、ガランはこれを支持している（Akol [ 2001: 221 ]）。

SPLM/Aの組織的な弱さを論じるとき、交通通信手段の問題を考慮に入れる必要があるだろう。特に初期の数年間、スーダン領内の広大な支配地域における、および支配地域とエチオピア西部のガンベラ地方を結ぶ主要な交通手段は徒歩であった。通信手段は、各地の司令官に支給されていた無線だけであった。したがって、本部と前線の移動と通信は容易ではなく、必然的に各地の司令官は、かなりの程度の独立性と自立性を保つことになった。1989年に国連主導の大規模な人道援助活動「スーダン生命線作戦」(Operation Lifeline Sudan: OLS) が開始されると、交通と通信の問題はかなり改善された。SPLM/Aは、非公式ではあるが、国連や国際NGOの交通・通信手段を利用できるようになったからである。また、内戦末期になると、有力な司令官たちは携帯の衛星電話を所持するようになっていた。しかし、初期においては、スムーズな情報の伝達と、迅速な人の移動はきわめて困難であった。SPLM/Aの組織的弱体の理由の一端は、ここに求められる。

同時にこのことは、ガランの独裁体制が、広大な地域に展開した組織の末端から中央までのすべてを意のままに掌握していたわけではないことを意味している。

さて、1991年以降、組織の改革は、ゆっくりしたペースではあったが進行的だった。1994年には、東エクアトリア地方のチュクドゥムで、第1回の「国民会議」(National Convention) が開催された。この会議には、北部からの代表団も含めて、数百名が参加し、最高意思決定機関として「国民解放評議会」(National Liberation Council) が設立された。解放区における文民行政システムの確立が決定されたのも、この会議においてである（Johnson [ 2003: 106 ], Rolandsen [ 2005: chap.4 ]）。しかし、国民会議は、第1回以降、開催されることはなかった。国民解放評議会も、有名無実な存在にとどまった。基本的にはガランの個人支配は最後まで継続したといえる。

## 2. 権力の濫用 反対派の粛清

1983年のSPLM/A結成当初、1960年代から活躍していたヴェテラン政治家たちが主要メンバーに含まれていた。彼らは、トップ・ファイヴのメンバーたちより年長で、1983年の時点ではジョン・ガランより著名であった。代表格として、ジョセフ・オドゥホとマーティン・マジエル・ガイの2名をあげることができる。

SPLM/Aの設立当初は、解放運動の制度と構造を確立しようとする試みがあり、オドゥホは政治・外交委員会の委員長、マジエル・ガイは司法・行政委員会の委員長に任命された。しかし、これらの委員会に重要性は付与されず、提言は軍事指導部によって無視された。これらの委員会の基礎文献は反故にされ、運動の憲法や内部規則などは作成されなかった。やがて、彼らは軍事指導部に疎んじられ、クーデタを企てたかどで、逮捕・拘禁された<sup>(31)</sup> (Nyaba [2000: 45])

オドゥホとマジエルの逮捕・拘禁以前、関係者を震撼させた事件に、当時SPLM/Aロンドン事務所代表であった、ベンジャミン・ボル・アコック (Benjamin Bol Akok) の不可解な死がある。ボル・アコックは、バハル・アル・ガザル出身のディンカ人で、マケレレ大学卒業の学歴をもつ。南部地方政府の大臣、南部議会の議員と副議長などを歴任した。彼は、政治的には反スーダン政府の立場と南部の分離独立を公然と主張しており、そのために逮捕・拘禁されたり、職を解かれたことがあった。南部人のあいだでは人気の高い政治家であった。1984年9月、SPLM/A本部は、アディスアババ訪問中であつたアコックが、肝臓疾患のため死亡したと発表した。実際には、空港でエチオピア政府の公安機関に拘束され、拷問を受けたのちに死亡したと考えられている。エチオピアの公安機関とSPLM/A指導部は密接な関係にあつたが、拘束と拷問をだれが指示したのかについては、ケルピノやガランの名前が取りざたされているが、現在にいたるまで真相は不明である。この事件

は、誕生したばかりの解放運動の前途に暗雲を投げかけた (Akol [ 2001: 22-24 ], Madut-Arop [ 2006: 81-83 ])

創設当初の3, 4年間, 組織の内部では解放運動の戦略や戦術, およびイデオロギー的基盤について自由に議論する雰囲気も場もなかった。1987年9月, イタン難民キャンプにおいて, 「進歩的将校団」(Progressive Officers) と称されていた高学歴のSPLM/Aメンバーを対象にした討論会が開催されたのが唯一の例外である。しかし, この討論会の直後, 進歩的将校団のメンバー約20名が逮捕され, 内部批判の自由は完全になくなってしまった (Nyaba [ 2000: 69-70 ])

先に引用したラム・アコルの批判にあったように, SPLM/Aには, 高学歴で行政職や専門職の経験がある有用な人材が多数参加していた。政治部門の弱体と軍事部門の優越, そして軍事主義が支配する状況のもとで, 彼らの多くには「反動的, プルジョワ的」という烙印が捺され, 排除されていったのである。

「綱領」第9章には「SPLA/SPLMの現実のおよび潜在的な敵」が規定されている。敵は内部と外部に類別され, 内部の敵としては4種類が列挙されている。「南部スーダンのプルジョワのおよび官僚的エリート」はそのひとつである<sup>(32)</sup>。この規定は, ガランの体制に異議を唱える人々を排除するさいの論理になったのである。

### 3. 「トップ・ファイヴ」の運命

ガランの死後, 後継者となったサルヴァは, 「SPLM/Aを創設した5人のうち, 生き残っているのは私ひとり」と述べたことがある。この5名とはガラン, ケルビノ・クワニン・ボル, ウィリアム・ニューオン・バニィ, アロック・トン・アロック, そしてサルヴァ・キール・マヤルディットである。5名は「政治・軍事最高指導部」(PMHC)の中核を構成した。

サルヴァ以外の3名は, いずれもガランに叛旗を翻して, SPLM/Aから離

脱した。つまり、終始ガランに忠誠を尽くしたのはサルヴァだけだったのである。

すでに述べたように、ケルビノは1983年5月に反乱を起こしたボル駐留の第105大隊の司令官であった。ニュオンはこの反乱に加わった第104大隊の司令官である。両者は部隊を率いて、エチオピア・ガンベラ地方のイタンに撤退し、先に到着していたガランと合流した。2大隊の将兵は、SPLA創設時の兵力の中核を構成することになった。こうした経緯のため、特にケルビノには、「自分こそが創設者である」という自負があった。

ケルビノとニュオン、それにアロックを加えた3名のあいだには、序列をめぐる確執があり、ときには公然とガランを批判した。彼らはトップへの野心を抱いていたといえる。ニュオンは参謀長として序列第3位にあり、サルヴァは副参謀長（作戦・治安担当）、アロックは副参謀長（行政と兵站）に任命されていた。

1983年から86年にかけて、「トップ・ファイヴ」は、SPLM/Aの権力基盤を確立するうえでは団結しており、彼らの地位を脅かす可能性のあるメンバーを排除しつつ、アニヤニヤⅡとの内戦を戦った。内部の矛盾が露呈してくるのはその後のことである。

最初に失脚したのは、序列第2位（副議長兼副最高司令官）のケルビノであった。1987年8月に「病気休養」の処分を受けたのちに拘禁された。アロックは、1988年3月に、スーダン政府と内通し反乱を企てた嫌疑で逮捕された。その結果、ニュオンが序列第2位、サルヴァが第3位に昇格した。ケルビノとアロックは、他の拘禁者たちとともに、1992年に脱走した。彼らは、1991年8月に結成された反ガランのナシル派に参加し、これを契機にナシル派は「SPLM/A統一派」として再編された。「統一派」はのちに、南部スーダン独立運動/南部スーダン独立軍（South Sudan Independent Movement/South Sudan Independent Army: SSIM/SSIA）と改称する。指導者はリエック・マチャルであった。

のちに、ケルビノとアロックは、自らの組織と将兵を代表して、個別にスー

ダン政府と平和協定を調印している。アロックは、1998年、当時のスーダン政府第1副大統領らと同乗した飛行機がナシルで墜落した事故で死亡した。ケルビノはSPLA主流派（ガラン派）に復帰するが、ナイロビでガラン殺害を企てたのち逃亡し、再度政府側に寝返った。のちに内紛のため殺害されている。

ニュオンは1993年にガランと袂を分かち、反主流派に参加した。スーダン政府から武器弾薬の供給を受け、エクアトリア地方で主流派の部隊と戦った。1995年2月には、ケルビノとともに、リエック・マチャルをSSIM/SSIAの指導者から罷免したと発表した。1995年4月、SPLM/A主流派との再統合を宣言し、ガランと和解するが、1996年1月、リエックの部隊によって殺害された（Madut-Arop [ 2006: 364-368 ]）。

以上のように、サルヴァを除く3名の運命は、離合集散と合従連衡を繰り返したSPLM/Aの歴史を象徴している。内紛は、イデオロギーや解放運動の大義をめぐってではなく、指導権をめぐる個人間の闘争であったという側面が強い。

#### 4．軍事文化の優越と解放闘争の理念からの逸脱

ケルビノとニュオンは、SPLAにおける軍人像のモデルのひとつであるとともに、「ウォーロード」的司令官の典型である。ともに、アニャニャの時代からのたたきあげの軍人であり、読み書きの能力はきわめて低かったといわれている。したがって、解放運動のイデオロギー的な指導者の役割を果たすことはできなかった。歴戦の勇者、ときには戦利品の一部を分配する気前のよい将として、配下の兵の信頼は篤かったが、同時に畏怖されていた。この畏怖は、彼らの身体がもつとされた超自然的な力と結びついていた。たとえば、ニュオンは、弾丸に対しては不死身であると信じられていた。最終的に殺害されたとき、銃で撃たれたのではなく、ナイフで刺殺されたのはそのためであるという語りを、私自身複数の南部スーダン人から聞いたことがある。激

情にかられて予測不能な法を無視した行動をとることも、2人の特性である。

ケルビノとニュオンは、政府軍司令官の時代から特権を濫用して、金銭、砂金、牛、象牙、豹皮といった財を個人的に蓄財した。当時、ジュバに本部のある南部軍団の司令官であったサディーク・アル・バナ (Saddiq al Bana) 少将 (ヌマイリ大統領の親戚) は、2人のこうした行為を黙認あるいは支援していたという (Nyaba [2000: 29])。

ケルビノにまつわるエピソードをみてみよう。1984年、SPLAとの戦闘でアニヤニヤⅡの指導者ガイ・トゥットが戦死したのち、ガランとともに遺体を検分したケルビノは、腐敗しはじめていた遺体を50回鞭打った (Akol [2001: 203])。1985年、イタン近郊のビルパム (Bilpam) にあった総合本部を訪問したケルビノは、6カ月から2年間の懲役刑の判決を待っている囚人8名をみつめた。彼は銃殺刑を命令し、刑は執行された (Nyaba [2000: 70-71])。

ウィリアム・ニュオンは、公然とガランを批判したことがある。1990年1月、青ナイル地方で政府軍に手痛い敗北を喫したニュオンは<sup>(33)</sup>イタンに戻った。1月8日、ガランの新たな命令が下され、すべての前線はガランの指揮下に置かれ、ニュオンは排除されてしまった。イタンで開催された集会で、少数の「ボル・ディンカ」がSPLAを牛耳っていると指弾し、ガランの名前には直接言及しなかったが、私的蓄財を批判した。この事件に対するガランの対応は、ニュオンを上ナイル州、ピポール地域の司令官に任命することだった。この地域は、政府側の民兵に組織されていた牧畜民ムルレ (Murle) 人のホームランドである。ニュオンは、敵対するムルレ人を討伐し、数千頭の牛を没収した。これらの牛は、ニュオンの個人的な財産になった。戦利品を手にするので、ニュオンの不満は一時的におさまったのである (Akol [2001: 217])。

スーダン政府軍の参謀学校の出身で、一時は南部議会の議員を務めたこともあるアロックは、ケルビノとニュオンよりは、はるかにインテリであった。しかし、彼も軍事文化を共有していたようだ。1987年、アロックは、脱走の嫌疑で中隊全員 (230名) を処刑したことがある (Nyaba [2000: 71])。軍人と

しての経歴がなく、工学博士の肩書きをもつラム・アコルも、1988年に、部下だった9名のシルック人兵士を処刑したことがある。反乱を企てたという理由で取調べはなかった。ラムは部下の将兵に配慮しないことで悪名高かったという (Nyaba [ 2000: 70-71 ])。ラムは、SPLM/Aの非民主的で独裁的な体制を批判して、1991年に反主流派を結成した3人の司令官のひとりである。

SPLM/Aには、1984年に制定された規律と刑法が存在した。特に死刑には慎重な調査が必要で、その執行には議長兼最高司令官の許可が必要であった。これらは実際の法の運用にあたっては、ほとんど無視されていたのである。法の支配は存在しないに等しかった。

解放されるべき人々との関係においても軍事文化が優越していた。SPLM/Aの支配地域では、統治のシステムは確立しておらず、将兵は解放し保護すべき人々をしばしば掠奪し、強制的に徴用・徴兵した<sup>(34)</sup>。

SPLM/Aは、設立当初から、解放区を樹立し、そこで統治と住民の政治教育をおこない、人々の支持を基盤にして解放闘争を展開するという志向がきわめて弱かった。これは、冷戦構造と北東アフリカ・中東の地政学のなかで、創設時からエチオピアを通じて東側諸国やリビアから軍事的支援を受けていたためと、国連や国際社会による人道的援助の食料や物資を流用することができたためである。つまり、武器と食料の調達について心配する必要のない、きわめて恵まれた立場に置かれていた。そのため、自力更生への努力はおろそかにされたのである。

## 5. 軍事訓練と個人崇拜

SPLM/Aは、設立当初から、エチオピア政府の支援のもと、エチオピア領内に新兵の訓練センターを開設した。将校の養成は、ガンベラの町の東方にあるボンガ (Bonga) で、一般の新兵の訓練は、イタン難民キャンプやディマ (Dima) 難民キャンプの近くにあるセンターでおこなわれた。この体制は、エチオピア社会主義政権が崩壊する1991年5月まで続いた。

ピーター・アドゥオク・ニアバ自身の経験にもとづいて、訓練キャンプでの生活をみてみよう。彼は1986年にSPLM/Aに参加した。ハルツーム大学を卒業して、ハンガリーで理学博士号を取得した彼は当時ジュバ大学の講師であり、壮年に達していた。運動に参加する以前の地位や職歴、年齢にかかわらず、全員が軍事訓練を受けるのが、SPLM/Aの原則だったので、彼も訓練キャンプに送られた<sup>(35)</sup>。以下は、彼の記述の要約である。

訓練キャンプは囚人の収容所のようなだった。新兵は、残忍に扱われ、非人間化され、脱革命化された。非人間化する主体は、インストラクターと情報将校であった。新兵は人間らしさ、尊厳、革命的熱情を失った。訓練を終え、前線に送られると、非武装の市民を襲うことになる。これは自らの男らしさ、尊厳と自信を取り戻す手段であった。訓練キャンプは、指導部の「パーソナリティ・カルト」を養成する場である。毎日8時間から10時間、指導者を讃える歌を歌う。革命・解放闘争ではなく、指導者個人を讃えるのである。SPLA兵士は、ガラン自身が革命であり、すべての兵士は彼に忠誠を尽くすべきであり、彼に対する批判は、すなわち運動全体に対する批判であると認識するようになる (Nyaba [ 2000: 52-53 ])

ニアバは、SPLM/Aにおいては、生活のすべての側面が軍事化され、政治的動員と意識改革が無視されており、軍事的権威主義がはびこっていたとする (Nyaba [ 2000: 55 ])。訓練キャンプは、こうしたシステムを支える不可欠の制度だったのである。

アドゥオク・ニアバが訓練を受けたのは、ボンガにあった将校訓練センターだったので、新兵の扱いは相対的にゆるやかだったと思われる。兵卒の訓練センターでは、もっと厳しい、「非人間化」を徹底するような訓練がおこなわれたようだ。エチオピア領内のディマ難民キャンプ近辺には少年兵の訓練センターがあった。かつてここで訓練を受けた若者から話を聞いたことがある。少年兵たちの生活は、基本的には、ニアバの記述と同様である。木

製の模造銃を与えられ、毎日数時間の軍事訓練を受け、ガランやSPLM/Aを讃える歌を歌う。政治教育だけでなく、読み書きの教育はまったくなかった<sup>(36)</sup>。将校の訓練センターとのちがいは、少年兵たちは、水汲みや薪拾いや洗濯など、一般の将兵の身の回りの世話の仕事をしていたことである。また、食事は質量ともに劣悪であった。1日2回、ドラム缶で料理したトウモロコシ粉の粥が支給された。困難に耐える能力を養うため、意図的に砂が混ぜられていたという。

この話を聞いたとき、若者が訓練を受けてから十数年が経過しており、彼はSPLM/Aを脱退していた。少年兵として非人間的な訓練を受け、ゲリラ兵士として生死の境をさまよう経験をしたにもかかわらず、ガランをどう思うかと尋ねたとき、彼の表情は輝いた。訓練キャンプを訪問したガランを歌と踊りで歓迎し、彼の演説を直接聞いた経験は、いまだに「よき思い出」なのであった。

さて、SPLA兵士がつくった多数の歌のなかから2つの歌詞を紹介しておこう。最初は、ガランが特に好んだといわれる歌である。これは、ビルパム大隊の歌でディンカ語とアラビア語で歌われた。1986年、17年ぶりの総選挙で成立した文民政権との平和交渉を拒否したガランを支持している。闘争のためには、「父親でも殺す」という歌詞に、軍事文化の優越が表れている（Akol [2001: 228-229]）。

ジョン・ガランは国を握っている  
 アラブは合意に達したいといっている  
 ジョンは同意しないだろう  
 国が荒廃しているというのに、なぜ同意できるのか  
 過去は繰り返さない（アディスアババ平和協定に言及）  
 我々は強大な軍勢だ  
 ビルパム（新大隊の名称）はまだボンガにいる  
 スーダンに侵攻したら

すべての建物は破壊されるだろう  
ビルパム，オーイエー  
ビルパム大隊は容赦ない  
我々の父親すら撃ち殺すだろう

2番目は、兵士のあいだで人気のあったというディンカ語の歌である。ガランを賞賛している（Shimanyula [ 2005: 41 ]）。

司令官たちよ  
意気軒昂な戦士たちよ  
高い士気を求める戦士たちよ  
勝利は、君たちの士気を高める  
士気を高くもとう  
こころをひとつにして、政府軍と戦おう  
政府軍を敗走させよう  
町と村を解放しよう  
SPLAの旗を掲げよ  
SPLAの旗を高く掲げよ  
南部人よ戦え、戦え、戦え  
ジョン・ガランは我らが指導者  
ジョン・ガランは我らが未来の大統領  
ジョン・ガランは未来のスーダン大統領  
ジョン・ガランはスーダン全体を統治する

ところで、SPLM/Aの軍事文化の起源は、いったいどこに求められるべきなのだろうか。再びアドゥオク・ニアバの解釈を引用すると、SPLM/Aのモデルは、ヌマイリ大統領時代のスーダン政府軍であるという。「トップ・ファイヴ」は、1973年から10年間、スーダン陸軍の将校であった。SPLAの公

安装置である「コンバット・インテリジェンス」は、ヌマイリの国家公安組織をモデルとしたものである（Nyaba [ 2000: 52 ]）。この点については、ダグラス・ジョンソンも同意見である（Johnson [ 2003: 92 ]）。命令系統，将校と兵卒との権威主義的な関係，軍隊と市民との敵対的な関係も，「敵」であるはずのスーダン陸軍をモデルとしたのであった。SPLM/Aは，単なる軍事機械として創成し，国民的な解放運動に成長することはなかったのである（Nyaba [ 2000: 52 ]）。

## 6 . SPLM/SPLAの分裂 ナシル派のクーデタ，1991年 8 月

1991年 5 月，エチオピア社会主義政権の崩壊は，SPLM/Aにとってきわめて大きな打撃であった。運動のパトロンであった政権が倒れ，政権が供与していた兵站，通信，交通，住居などの便宜，エチオピア国内における安全の保障など，運動を継続するためには必須の条件のすべてを失ったのである。SPLM/Aのメンバーと南部スーダン難民のすべては，スーダン領内への撤退を余儀なくされた。彼らは，エチオピア国境に近い，上ナイル地方の 2 カ所 ナシルとプチャラ（Pochala） に集結したが，飢えと政府軍による攻撃に悩まされることになった。大混乱の時期であった同年 8 月 28 日，ナシルにいた 3 名の司令官，リエック・マチャル，ラム・アコルとゴードン・コンが，一方的にガランの解任を発表した。独裁的体制に叛旗を翻したクーデタであった。これ以降，SPLM/Aは，トリット派（主流派）とナシル派（反主流派）に分裂し，抗争を繰り広げた。政府軍は反攻を開始し，SPLM/Aは創設以来最大の危機を迎えることになるのである。

クーデタ時におけるナシル派の立場を表明した文書として，ラムが起草した「なぜガランは去るべきか」(“ Why Garang Must Go Now ”)がある（Akol [ 2003: 306-312 ])<sup>37)</sup>。これは，ガランの個人支配と独裁体制を最も包括的に批判した文書として重要である。序論において「ガランは彼自身が運動であり，運動は彼自身であると信じている」と総括し，以下「ワンマン，ノーシステ

ムの独裁制」,「軍事主義」,「人権侵害」という3つの節にわたってガランを批判し,提言と結論を添えている。批判の要点は以下のごとくである。運動には政治機構がまったく存在しないこと,すべての権力がひとりの男に集中しており,彼は議長兼最高司令官から武器庫の管理人にいたるすべてであること,財務のすべてをひとりで掌握していること,政治的側面がなおざりにされ,軍事的側面のみが卓越していること,ガランと政治的立場を異にする者がゆえに拘禁されたメンバーが多数おり,法的手続きをへずに処刑された者や,拘禁中の拷問を受けた者もいること,難民となった少年たちを強制的に徴兵したこと。

SPLM/Aの内紛は,路線闘争 闘争の目的は,スーダン全体の解放か,南部スーダンの分離独立か という側面ももっていた。分離独立を渴望し,独裁体制の打破と組織の民主化を夢見た多数のメンバーが,ガランと袂を分かってナシル派に加わった。しかし,反主流派に期待した人々は,すぐに現実に幻滅することになる。ナシル派の指導者たちは,クーデタの以前からスーダン政府と内通しており,公然と武器の援助を受けた。矛先は,敵であるべきスーダン政府軍ではなく,SPLM/A主流派と主流派を支持するとみなされた市民に向けられたのである。現在では,SPLM/Aの分裂は,イデオロギー闘争の結果というより,権力をめぐる個人間の争いの側面が強く,南部スーダン人に破壊的な悲惨な結果をもたらしたと分析されている(Nyaba [2000: chap. 3], Johnson [2003: 91-99])。しかし,ラム・アコルが1991年に書いた「なぜガランは去るべきか」は,ガランの個人支配のあり方を批判的に記述し,当時のSPLA将兵の多数の心情を代弁していたことは否定できない事実であった。

ジョン・ガランが,1983年から数年のあいだに築きあげた個人支配にもとづく独裁的な体制は,たしかに軍事的には大きな成果をあげた。1991年の時点では,南部スーダンのほとんどの地域を支配下におさめ,その勢力は北部の一部地域にも及んでいたのである。しかし,この体制のつけは大きなものであった。組織は分裂し,内部抗争を繰り返し,南部スーダン人に多大の犠

牲をしいることになったのである。

## 結論

本章で扱ったのは、20数年におよぶSPLM/Aの歴史のなかで、主として前半に相当する約10年の期間である。本章ではあまり論じることのできなかつた後半期、特に1994年に開催された「国民会議」以降は、個人支配から集団的な指導体制への転換と、支配地域における文民による地方行政のシステムの確立が試みられた。しかし、さきに述べたように、その成果は目にみえるかたちでは現れなかった。

組織としてのSPLM/Aと、そのなかでのガランの地位と役割は、1990年代末からようやく変化しはじめる。軍事的には、政府軍に対する数々の勝利をおさめ、1992年以降に失った支配地域の多くを回復した。政治的には、反主流派との和解に成功し、かつて袂を分かち戦いを繰り返してきた指導者たちが、ガランを頂点とする主流派の旗のもとに復帰した。

2002年から本格化したスーダン政府との平和交渉も、SPLM/Aに大きな影響を及ぼしたと考えられる。長期におよんだ交渉は議題も多岐にわたり、とてもひとりでまかないきれものではない。必然的に集団指導体制と事務局の確立が求められた。また、包括的平和協定の調印が日程にのぼるようになると、SPLM/Aは、スーダン全体と南部の政治と行政に責任を負うようになることが明確になった。組織の確立と、様々な分野の人材の登用と育成が、急務となったのである。

以上の状況のもとで、ガランの個人支配にもとづく独裁体制も、ようやく変化を迎えることになった。第1に、マスメディアだけでなく、南部スーダン人にとっても、ガラン自身の露出度が増大した。平和交渉のなかで、リエック・マチャルなど、かつての政敵に重要な役割を割り当てるようになった。SPLM/Aのメンバーと接触する機会も増大し、そうした公式の会合の場で、

運動の構造的問題を論じる、つまり間接的にガランを批判することも可能になった。

つまり、1990年代末から数年間をかけて、SPLM/Aは、議長兼最高司令官にすべての権限が集中した戦時のゲリラ組織から、平時の政治・軍事組織政権を担うことのできる政治組織と国家の正規軍へと、変貌をとげつつあったのである。

しかし、2004年11月に生じたガランとサルヴァの対立は、こうした変化にもかわらず、依然としてガランの個人支配の体制は継続していたことを暴露した。これは、包括的平和協定調印の直前の時期に発生した、SPLM/Aの再度の分裂やクーデタの危険すらあった重大事件であった。その経緯については先に述べた。ここでは、11月末から12月はじめにかけて、ルンベックで開催された緊急の最高幹部会議におけるサルヴァの発言をとりあげる。

「もし、我々がナショナルな指導者であるなら、しかし私はそうは思っていません。なぜなら、指導部の構造にまとまりがないからです。自分たち自身に正直になりましょう。この会議が終われば、我々は外国訪問の旅に出るのですから。

運動の構造を導く、行動規範 (code of conduct) は存在しません。議長の外遊中、なんの指示ものこされず、議長代行も存在しません。だれが運動の責任者なのか、私にはわからない。それとも、議長は(責任を引用者)ブリーフケースに入れてもち運んでいるのでしょうか。

議長は、指導部評議会 (Leadership Council) を設立することによって、国民執行評議会 (National Executive Council) を殺してしまいました。しかし、国民会議 (National Convention) の条項には、指導部評議会のことは1行も書かれていません<sup>(38)</sup>。彼は、PMHCを再興したいのでしょうか。(中略)

議長はすべてです。財務官から最下級の役職まで。構造の欠如のゆえ腐敗が生じ、除去するのが困難なほどに悪化した説明責任の欠如も生じてい

ます。

実際、我々が対処すべき行政上の問題は多々あります。特定の個人が議長と直接接触することを許すことのために生じる指揮系統の機能不全も、こうした問題のひとつです。(各州の引用者)知事が直接議長に対して責任を負うとすれば、ダニエル・アウェット司令官の仕事<sup>(39)</sup>はどうなるのでしょうか。

議長は、(各県の引用者)長官<sup>(40)</sup>の任命をすべきではありません。

蔓延する腐敗についてひとこと申し上げたい。現在、我々の運動のメンバーのなかには、私的な会社を設立し、屋敷を購入し、外国の銀行口座に莫大な預金をもつ者がいます。我々自身が、こういう具合に悪行にふけてきたことを考えると、これからいったいどんなシステムを南部スーダンに樹立しようとしているのか、疑問に思います」。

すでに述べたように、この発言は、2005年8月8日の*The East African*紙に掲載された<sup>(41)</sup>。この発言には、個人支配のあり方が凝縮されて表現されている。1991年に書かれたラム・アコルの「なぜガランは去るべきか」と比べてみると、主要な内容が重複していることに気づく。2つの文書に依拠するが、ガランの個人支配の本質は継続していたといえる。

さて、本章の第1節では、4つの問題系を設定した。すなわち、(1)ゲリラのリーダーという個人にかかわる問題系、(2)組織の支配にかかわる問題系、(3)人々の支配にかかわる問題系、(4)紛争終結後の問題系である。

最初の問題については、スーダンの問題は「南北問題」ではなく、ナショナルなアイデンティティにかかわる問題であり、スーダン全体を解放して多民族、多宗教、多文化の多元主義的な国家を建設する以外に解決の道はないというヴィジョンを一貫して説き続けたという点で、やはり卓越した指導者であったといえる。群をぬく学歴と職業軍人としての成功という経歴と、弁舌の巧みさ、会った人の心をつかむ魅力といったパーソナリティ、そして障害を容赦なく排除する冷酷さも、優れた指導者としての資質であった。2番

目の問題については、SPLM/Aにおける意思決定のシステムは、設立の当初からガランの死に至るまで脆弱であった。政治部門であるSPLMは弱体で、少数の取り巻きを重要な役職に任命していた。組織の運営のすべてを、ガランという個人が掌握する体制は、若干の修正はあったにせよ、基本的には最後まで継続した。

3番目の支配のシステムについていえば、解放区における統治のシステムは、SPLM/Aの歴史の前半期には存在しなかった。SPLM/Aは、解放区の人々の支持を運動の基盤にするような組織ではなかったのである。1990年代末以降は、文民行政のシステムが徐々に整備されていったが、州と県レベルの地方行政の長をガラン自身が任命するという方式は不変であった。

4番目の問題は、ポスト・ガランの時期にあたるCPA調印後のSPLMが、まさに直面している問題である。CPA調印の2、3年以前から、戦時体制から平時への転換が試みられていたが、十分な準備が整う以前に、SPLMは政党に衣替えし、CPAで規定された権力分有の原則にもとづいて、南部政府の大半と北部政府の一部の責任を負うようになった。行政、立法、司法の各部門で働くべき人員は圧倒的に不足しており、戦後復興にとって大きな問題となっている。さらに、SPLM/Aが構想していた南部スーダンという政体のあり方と、CPAに規定された政体とのあいだにはギャップがあった。前者は、大統領に権限が集中し、立法府と司法の権限が相対的に弱い政体を望んでいたが、CPAで規定されているのは完全な三権分立制である。国連と国際社会は、戦後復興の資金のドナーであるとともに、CPAの実施を監視する立場にあり、SPLM/Aはその意向に従わざるをえない。したがって、SPLM/Aは内戦中に享受していたような政治的自立性の多くを喪失したといえる。

現在のSPLMは、大きな転換期にあるといえる。同様に、大半は南部政府の軍隊となり、一部は政府軍との統合部隊に編成され、首都ハルツームを含む全国に展開しているSPLAも、ゲリラから正規軍への転換の過程にある。

CPAで規定された暫定期間は6年間である。2008年には総選挙が実施され、スーダンの大統領と国民議会議員、南部の大統領と南部議会の議員、全国の

州知事と州議会の議員などが、新たに選出されることになっている。2011年には住民投票が実施され、南部は統一されたスーダンにとどまるか、分離独立するかを選択することになる。2011年後のスーダンは、いかなる国家体制をとることになり、スーダン人にはいかなる将来が待ち受けているのだろうか。それは、SPLMとSPLAが、ジョン・ガランが20年以上にわたって維持した個人支配というシステムなきシステムをいかに払拭し、平時の「普通の」組織になれるか、南部スーダン人のみならずスーダン人の多数を代表する組織になれるかどうかにかかっているのである。

〔注〕

- (1) 2003年12月に、ケニア北西部で、ケニアとウガンダの牧畜民およびスーダン難民の若者が参加して開催された「平和マラソン」の主催者である、南部スーダン人のNGO活動家（私の知人）と女性マラソン・ランナー、テグラ・ロローペ（Tegra Loroupe。数年前まで世界記録保持者）の一行。平和マラソンの報告と、将来南部スーダンで平和マラソンを開催を認めてくれるよう依頼した。
- (2) この数字はガラン自身の言葉による。ハルツームの総人口に相当するので、これは誇張であろう。
- (3) 「スーダン北部人」は、一般的にはアラブ系のムスリムが多数を占めるといわれる。しかし、実際には多様な非アラブ系諸民族集団を含んでおり、多様性を表すために、ダルフル地方とコルドファン地方の人々は西部人（Westerners）、紅海地方の人々は東部人（Easterners）と呼ばれる。
- (4) 日刊の*The Daily Nation*と*The Standard*、および週刊の*The East African*紙。
- (5) 包括的平和協定の実施によって、ハルツームに「国民統一政府」が成立し、ラム・アコルは外務大臣、ピーター・アドゥオクは上院議員に任命された。
- (6) Gabriel Achoth Deng。2番目の名前はAcuothとも表記される。1936年、コンゴル（Kongor）生まれのディンカ人。政府職員をへて、1964年、ジャーナリストに。1971年、反ヌマイリのクーデタに連座して逮捕、1年間拘禁される。1972年、南部地方政府の行政官に任命される。1984年、SPLM/SPLA参加。キューバ事務所代表（「大使」）、長老委員会委員長などを歴任した（Deng [2005: 5-7]）。
- (7) Arop Madut-Arop。 *Heritage Weekly Newspaper*の編集者、スーダン教会評議会（Sudan Council of Churches）広報主任（Advocacy and Communication Desk, 1988～1994年）。1990年逮捕、14カ月拘禁される。1986年以降、スーダン国内外で、政府側、反政府側双方関係者多数にインタビューをおこなう。その成果

- が著作の主要な情報源となっている (Madut-Arop [ 2006: xxiii-xxv ]).
- (8) 南部スーダン最大の民族集団。西ナイル系の言語を話す。多数の「部族」から構成され、ガランはボル ( Bor ) 部族の出身である。
  - (9) 一般に第 1 次スーダン内戦は「 17 年戦争」と呼ばれるが、反政府ゲリラが組織化され、内戦が本格化したのは 1960 年代前半になってからである。
  - (10) たとえば、“Obituary, John Garang”, by Julie Flint, *Guardian*, 2005 年 8 月 3 日付け。
  - (11) [http://www.gurtong.org/GarangTribute/Biographyof\\_LateDr.JohnGarangde-Mabior.asp](http://www.gurtong.org/GarangTribute/Biographyof_LateDr.JohnGarangde-Mabior.asp) ( 最終確認日 2007 年 8 月 8 日 )。
  - (12) 後述のように、1983 年 5 月 16 日は内戦が開始された日であり、SPLM/A の創設はその約 2 カ月後であった。
  - (13) “Sudan and the Civil War: Grinnell College Resources; Insight from Grinnell College Faculty on Former Student John Garang, Sudan Civil War,” College Campus News ( 31.10.03 ) <http://www.collegenews.org/x2894.xml>; ( <http://www.grinnell.edu/offices/ce/news/103120031/> )。
  - (14) タイトルは “ Negotiating Peace in Sudan ”。 <http://www.lectures.iastate.edu/lecture/397>
  - (15) <http://www.iastate.edu/~nscentral/news/2006/jan/nyandengdemabior.shtml>。
  - (16) “A Former Rebel’s Search for Sudanese Identity,” by Nora Boustany, *Washington Post*, 2005 年 2 月 11 日付け。
  - (17) 人口的にはディンカ人に次ぐ位置を占める南部スーダンの民族集団。ディンカと同様、西ナイル系の言語を話し、多数の「部族」から構成される。第 2 次内戦中には、多数のヌエル人が政府側民兵に組織され、SPLA と戦うとともに、ヌエル人同士の武力紛争が頻発した ( Johnson [ 2003 ] 参照 )。
  - (18) この情報は、スクロギンズ自身がリエックにインタビューして得たものである。
  - (19) *Jallaba* はもともとは移動商人を意味する。南部では、北部のアラブ人全体を指す語として用いられている。
  - (20) 南部スーダン人のリンガフランカは、実はアラビア語である。ただし、北部のアラビア語とはかなり異なる、ピジン化したアラビア語である。
  - (21) この語には、西洋化し、スーダンの現実から遊離してしまった男というニュアンスがある。
  - (22) 私の古い友人であり、現在 SPLA の大佐の地位にある男性は、1983 年 5 月以前、ケルピノ少佐がジュバで秘密裏に開催していた会合のメンバーであったと語ったことがある ( 2007 年 1 月 )。当時彼は高校を卒業したての若者であり、1983 年末に SPLM/A に参加した。したがって、ケルピノがなんらかの地下組織にかかわっていたことは事実であると思われる。

- (23) 私の手元にある綱領は、タイプ印刷された30ページの冊子である。*Manifesto, Sudan People's Liberation Movement*, 31st July, 1983. Reprinted by Office of the Representative SPLM/SPLA, Southern Africa.
- (24) アベル・アリエルによれば、アテムの殺害は1985年、チュオルの戦死は1986年はじめの出来事であった (Alier [ 1992: 275 ])。別の資料も、チュオルは1986年に戦死したとしている (Madut-Arop [ 2006: 81 ])
- (25) Political Military High Command と呼ばれることもある。
- (26) ガブリエル・アチョッス・デンのPMHCメンバー補のリストでは、ヴィンセント・クワニの代わりにニヤチガック・ニヤチルック (Nyacigak Nyaciluk) の名前があがっている (Deng [ 2005: 144 ])。ニヤチルックは、1986年、政府軍との戦いで戦死したので、代わりにクワニが任命されたものと思われる。
- (27) 1988年にアニヤニヤ II の将兵の多数を率いてSPLAに加わったゴードン・コンは、PMHCのメンバー補に任命されていた。
- (28) ガラン、ニュオン、サルヴァ・キール、ジェームズ・ワニ、ダニエル・アウエット、クオル・マニヤン、マーティン・マニエル、ルアル・ディーン、ガレリオ・モディの9名。
- (29) ダウド・ボラッドは、1991年末、部隊を率いてダルフルに侵攻するが敗北し、スーダン政府に捕らえられ処刑された (Johnson [ 2003: 140 ])。この悲劇はダルフルの政治におおきな影響をおよぼすことになる。
- (30) ハデンドワは東部の紅海地方に位置する。
- (31) オドゥホとマジエルの拘禁は1992年まで続いた。同年9月、ガランに叛旗を翻したウィリアム・ニュオンによって、ケルピノやアロックとともに、東エクアトリア地方にあった監獄から解放された。オドゥホとマジエルの両名は、反主流派SPLM/SPLA United (統一派) の創設に参加するが、1993年に内紛のため殺害された。
- (32) *Manifesto*, pp. 21-23. なお、内的な敵の他の3者は、北部スーダンのブルジョワのおよび官僚的エリート、宗教的原理主義、アニヤニヤ II の反動的司令官である。外的な敵は、アフリカ・アラブの反動的諸国と帝国主義である。
- (33) このとき、スーダン政府軍はエチオピアの反政府武装組織と共同作戦をおこない、青ナイル地方のSPLA部隊を一蹴して、さらにエチオピア領内に侵攻し、アソサ (Asosa) の町と難民キャンプを攻撃した (栗本 [ 1996: 262-263 ])
- (34) 政府軍ばかりでなく、SPLAによる人々に対する人権侵害は、人権団体の報告書に記録されている (Human Rights Watch/Africa [ 1994 ])
- (35) ただし、この原則には例外もあった。たとえば、ニヤバの友人であり、博士号をもつラム・アコルは、ガランの命によって訓練を免除されたばかりか、いきなり司令官に任命されている (Akol [ 2001: 58-61 ])
- (36) 少年兵たちの多数は、難民キャンプに行けば学校で教育が受けられるという、

SPLM/Aのプロパガンダを信じて、長く困難な徒歩の旅をへてエチオピアにたどり着いたのだった。

- ③7) この文書は、ナシル派のニュースレター、*Southern Sudan Vision*, no.12 (1周年特集号)に掲載された。のちに、ラム・アコルの著書(Akol [2003])の付録にも収録されている。
- ③8) 1994年に開催された国民会議において、SPLM/Aの最高執行機関として国民執行評議会が設置された。しかしガランは、これを無視して新たに指導部評議会を設置した。
- ③9) ダニエル・アウェットは、地方行政の責任者であった。したがって、各州の知事は、議長(ガラン)にではなく、アウェットに報告の義務を負っていた。
- ④0) SPLM/Aの地方行政システムによれば、州(state)のもとに県(county)が置かれていた。県の行政のトップが長官(commissioner/secretary)である。数十名いる県長官のすべてをガラン自身が任命していた。
- ④1) この記事は以下のウェブサイトにも掲載されている。[http://www.sudantribune.com/article\\_impr.php3?id\\_article=11086](http://www.sudantribune.com/article_impr.php3?id_article=11086)。

### 〔参考文献〕

#### <日本語文献>

- 栗本英世 [1996] 『民族紛争を生きる人びと 現代アフリカの国家とマイノリティ』世界思想社。
- [2006a] 「ジョン・ガランにおける『個人支配』の研究序説」(佐藤章編「アフリカの「個人支配」再考」アジア経済研究所 105~122ページ)。
- [2006b] 「教育に託した開発/発展への夢 内戦、離散とパリ人」(田沼幸子編『ポスト・ユートピアの民族誌 トランスナショナルリティ研究 5』大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文科学」 223~241ページ)。

#### <外国語文献>

- Akol, Lam [2001] *SPLM/SPLA: Inside an African Revolution*, Khartoum: Khartoum University Press.
- [2003] *SPLM/SPLA: The Nasir Declaration*, New York: iUniverse.
- Alier, Abel [1992] *Southern Sudan: Too Many Agreements Dishonoured*, 2nd ed. Reading: Ithaca Press.
- Clapham, Christopher [1998] "Introduction: Analysing African Insurgencies," in C. Clapham ed., *African Guerrillas*, Oxford: James Currey, pp. 1-18.

- Deng, Gabriel Achoth [ 2005 ] *Wars and a New Vision for Sudan*, 出版地・出版社不明.
- Garang, John [ 1992 ] *The Call for Democracy in Sudan*, edited and introduced by Mansour Khalid, London: Kegan Paul International ( enlarged and revised edition of John Garang Speaks, 1987 )
- Human Rights Watch/Africa [ 1994 ] *Civilian Devastation: Abuses by All Parties in Southern Sudan*, New York: Human Rights Watch.
- Johnson, D.H. [ 1998 ] “The Sudan People’s Liberation Army and the Problem of Factionalism,” In C. Clapham ed., *African Guerrillas*, Oxford: James Currey, pp. 53-72.
- [ 2003 ] *The Root Causes of Sudan’s Civil Wars*, Oxford: James Currey.
- Johnson, D.H., and Gerard Prunier [ 1993 ] “The Foundation and Expansion of the Sudan People’s Liberation Army,” in M.W. Daly and A.A. Sikainga eds., *Civil War in the Sudan*, London: British Academic Press, pp. 117-141.
- Madut-Arop, Arop [ 2006 ] *Sudan’s Painful Road to Peace: A Full Story of the Founding and Development of SPLM/SPLA*, BookSurge.
- Nyaba, Peter Adwok [ 2000 ] ( 1997 ) *The Politics of Liberation in South Sudan: An Insider’s View*, 2nd ed., Kampala: Fountain Publishers.
- Rolandsen, Oystein H. [ 2005 ] *Guerrilla Government: Political Changes in the Southern Sudan during the 1990s*, Uppsala: Nordic Africa Institute.
- Scroggins, Deborah [ 2003 ] *Emma’s War: Love, Betrayal and Death in the Sudan*, London: HarperCollins.
- Shimanyula, James Bandi [ 2005 ] *John Garang and the SPLA*, Nairobi: Africawide Network.

< 新聞 >

*The Daily Nation*

*The Standard*

*The East African*

*The Washington Post*

*The New York Times*

*The Guardian*

< SPLM/A関連資料 >

*Manifesto, Sudan People’s Liberation Movement*, 31 July 1983. Reprinted by Office of the Representative SPLM/SPLA, Southern Africa.

*New Sudan*, pilot issue October 1986, no.2, June/July 1994.

*SPLM/SPLA Update.*

*Southern Sudan Vision* ( published by the SPLM/A Nasir faction )

<ウェブサイト>

[www.SPLMToday.com](http://www.SPLMToday.com)

[www.sudantribute.com](http://www.sudantribute.com)

[www.gurtong.org](http://www.gurtong.org)

**資料1** ジョン・ガランの演説，スーダン共和国第一副大統領就任式，ハルツーム，2005年7月9日（<http://www.SPLMToday.com>）

「（前略）すべての学生と若者たちに挨拶を送ります。紛争後の時期に入った今，諸君たちには将来に向かって努力してほしい。なぜなら，国家の再建は，君たち若者の世代の責任であるからです。

（中略）

包括的平和協定（CPA）と暫定国民憲法（INC）によって，私たちはすべてのスーダン人民によるすべてのスーダン人民のための真の独立を実現する過程を開始することになります。CPA，INC，そして今日の就任式は，私が旧スーダンの第1共和制と呼ぶものの公的な終焉と，新スーダンの第2共和制の開始を告げるものです。これからは，歴史上はじめて，スーダンは，自決権と大衆の意思を諮る権利にもとづき，正義と人びとの自由意志によって自発的に統一された国になるのです。この国では，人種，宗教あるいはジェンダーの違いにかかわらず，すべての市民の人権，自由と尊厳が，完全に尊重されるでしょう。（中略）私は，すべてのスーダン人民と政治勢力に，CPAとINCに関するコンセンサスを形成し，良き統治と平等な開発の実現，腐敗の一掃，スーダンの再出発をはじめよう呼びかけます。これらが実現すれば，膨大な自然・人的資源を有するスーダンは，北東・東アフリカ，アフリカ全体，そして世界のモデルとなるでしょう。

（中略）

第3に，すべてのスーダン人に，あなたたちは自由だと告げたい。CPAとINCには，あなたたちの諸権利，人権，政治・社会・宗教・文化的権利のすべてを保障する条項があります。あなたたちは自由なのです。スーダン人よ，羽根をひろげて飛び立ちなさい。より一層の自由へ，すべての人に自由と正義をもたらす新スーダンに向かって，飛び立ってください。（以下略）」